少年

明治三十七年三月一日發行（每月一回一日發行）
明治三十六年九月二十九日第三種郵便物認可



第六號
三月一日發行
每月一回

時事新報社

此廣告を見て御注文の御方は時事新報社發行の『少年』に依る旨御申添を乞



『少年』第六號

目次

口繪 『斥候の衝突』（石版畫十度摺） 岡田三郎助筆

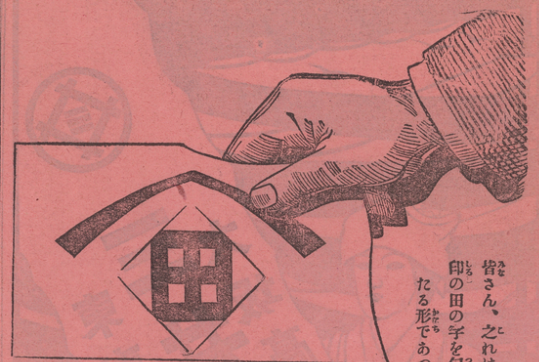
中繪 鳥を捕る大蜘蛛（寫眞版） 旅順の大海戰（同上）

平和の仇 …… 永洲
太郎さんのコーダック …… ひばり
國旗 …… 岩野泡鳴
雛まつり …… 仰天子
水泡船 …… 田中花圃
蜘蛛の話 …… 理學博士 渡瀨庄三郎
犬の足跡 …… はうめい
エキスモー人種 …… 松村瞰峰
潜航艇と潜水艇 …… 少兵少尉 太田健朝
戰闘と砲兵 …… 少兵少尉 太田健朝
鷄車手遊瀛車 …… 川面弘
圓突取壞はしの便方 …… 久信

姫鹿 …… 英國幼年皇族と海軍 …… 海軍大佐 谷北澤樂天
我が海軍兵學校 …… 梅泉
戰國漫遊記 …… 拘月生譯逸
刀の切味 …… 安岡秀夫
不思議な端書 …… 安岡秀夫
日露の開戰 …… 露國無禮の條々
懸賞當選披露 …… 第五回懸賞作文
懸賞考物答案 …… 第六回懸賞考物
雜報 …… 北澤樂天出題



此廣告を見て御注文の御方は時事新報社發行の『少年』に依る旨御申添を乞



皆さん、之れは醬油の商標で鼈甲と云ふのであります。〈醤〉印の田の字を包む四隅のハノ印は、八字髭の上下より包合したる形であつて、眞四角ではなく、角の處が明いて居るので、卽ち〈ヒゲタ〉と讀むのであります。此の〈醤（ヒゲタ）〉印醬油は、上等の大豆と、小麥と、特に精製したる食鹽とで釀造されたるもので、其の良品なることは、曩くも宮内省大膳職より常に御用を命ぜられ、又た内外博覽會に出品する毎に、金銀賞牌及び一等賞を下賜せらるゝのでも證明し得るのであります。然して此の〈醤（ヒゲタ）〉印醬油は、今より二百八十九年前、元和二年に田中玄蕃の中古の祖先が、下總國銚子港に創業されたものであつて、關東醬油の中で一番古い歷史をもつて居るのであります』

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL AWM2020.22.307

此廣告を見て御注文の方は時事新報社の發行『少年』に依る旨御申添を乞

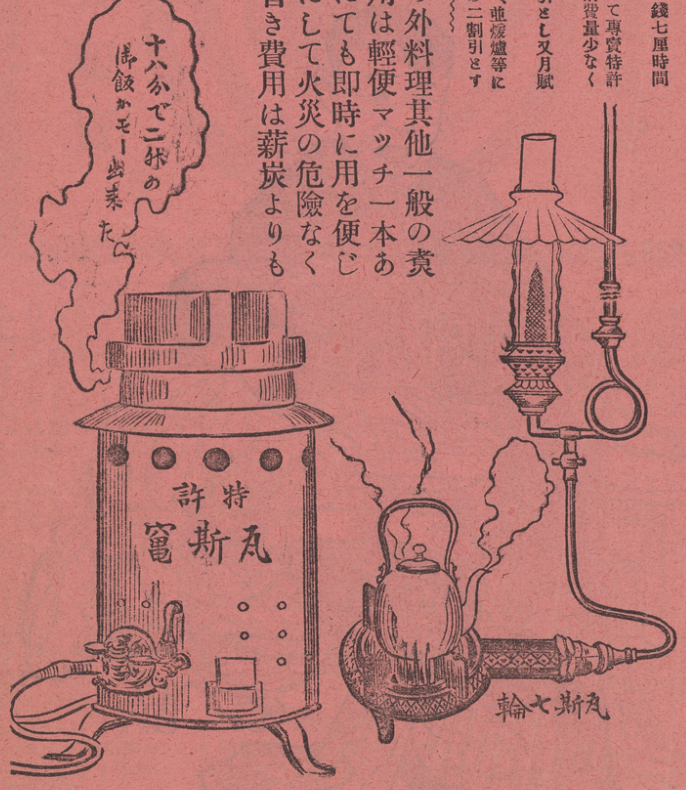
瓦斯の煮燒

輕便（瓦斯は燈火用外各種に應用すべし）德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし
○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり
○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す
○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、竝煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尙各種瓦斯器具は當社構內陳列所又は銀座所等へ陳列縱覽に供居候御立寄御一覽被下度候



東京神田錦町 東京瓦斯株式會社
（電話本局（一三番、五四八番、二三〇三番）



「少年」漫畫

◎人間より骨が一本多い

藥局生野呂田「嬢さん坊ッちやん人間の體内には骨が二百八本あるのですよ

嬢さん「私には二百九本あるよ

野呂田「へーどうして……そんな事があるものですか

嬢さん「だッて私昨夕御飯の時お魚の骨を一本呑だもの



此廣告を見て御注文の御方は時事新報社發行の『少年』に依る旨御申添を乞

少年用空氣銃

各種大販賣



本書は體力養成之良師友也

西洋の人が大きいからと言ふて別に驚くとはない日本の我等が小さいからと言ふて更に悲むとはない強い弱いは皆膽力である膽力の養ひ方が足らぬ時は大きな身體でも何の用をなさぬ日本の少年は何でもかでも膽力を養ふて大和魂即ち世界無類の大元氣を現さなければならぬ其の養ひ方は色々あるが此體力增大法の樣に行ひ易きものはない小兒の時から此の方を行ふたならば大人と成つて屹度強い人となる又學校でも好成績を得らるゝ夫れは身體が丈夫に成つて腦の働きが丈夫となるからである器械體操等の如き唯身體を働かした丈ではトテモ駄目であるエライ將軍となりエライ政治家となりエライ思想家となりエライ實業家となり何でも力と膽とを養ふには此方法を第一番に行はねばならぬ日本の少年は速に之を行い之を達し早く偉人を成し給へ

此方法は一ツの器械を不要

前陸軍編修 巽 來次郎君實驗

時事新報社 畵伯 北澤君實寫



一冊定價金貳拾錢 郵稅金貳錢 送金は郵券代用にても不苦

書肆 東京神保町 合資會社 敬業社

「少年」漫畫

◎遠廻しのお強請おめそ「お節句のお祝ひに伯父さんが下さッた人形は私一番好よ、それでねあれが二タ子だッたら尚々大好よ



此廣告を見て御注文の御方は時事新報社發行の『少年』に依る旨御申添を乞

東京 博文館發行 本町

少年少女の必ず讀むべき書

全部壹百冊

世界お伽噺

改正定價八錢

巖谷小波君著 最新刊

▲第五十二編●密畫數十個挿入美本

鬼大名

正價八錢 郵稅二錢

之は獨逸の話で彼地の芝居に演ぜられたる位な有名なる中古勇士の譚で彼の生立より鬼大名となる愉快な本

▲第五十三編●密畫數十個挿入美本

魔法學校

正價八錢 郵稅二錢

仲好しの三人の子供が魔法學校を卒業するの艱難苦心は奇絶妙絶驚くばかりで其中の一人がいらい出世の話

▲第五十四編●密畫數十個挿入美本

鶯王子

正價八錢 郵稅二錢

ある國の王子が或る罪を犯した罰で七年間鶯になつて居るといふ奇談で夫が元の人間に成ると云目出度き話

▲正價 六冊四十五錢十二冊八十五錢郵稅一冊二錢宛

日露開戰軍歌

大和田健樹先生著 全壹冊菊判半截美本

正價三錢五厘 郵稅三冊迄二錢

彼の暴露を討つべき千載一遇の好機は目睫の間に迫る日本武烈の劍電一たび滿洲に望まば獰鷹倏ち翼を收めん本書は唱歌に雷名ある先生の新作にして字々峻烈句々活躍一讀敵愾心を奮起せしめ再誦心血を熱騰せしむるの慨あり實に之れ刻下必讀の軍歌也

露國サマロフ著 文學士 中内蝶二君譯 全一冊美本

日露戰爭未來の夢

正價廿五錢 郵稅六錢

日露問題愈々破裂して東洋の風雲益々急に砲火旅順に轟き劍戟滿洲に閃く今に當つて先づ世人の念頭に來るものは日露の强弱問題なり而して此問題を最も愉快に最も趣味深く解決したるものは即ちこの戰爭小說なり且つ本書は露國人の日露戰爭觀にして著者自身が己れの本國を如何に觀察せるかまた日本に對して如何なる同情を有せるかを見るべし

乞此廣告を見て御注文の御方は時事新報社發行の『少年』に依る旨御申添を乞

宮内省御用



美術袋物類　貴金屬細工



時計及附屬品

婦人小間物類

其他各種

東京市下谷池之端仲町廿九番地

玉寶堂　飯塚伊兵衛

電話下谷　晴九六五・一二四四

少年

第六號

三月一日發行

平和の仇

永洲

『四百餘州を驅る』の譜

おのれ平和の仇讎
花は今ぞ咲く
われを誰れぞか思ふ
仁義を楯として
國は小さし遮莫
知らずや元寇の
懲りずまのスラヴの種族
あらゆる卑の手に
檣に車を押して
關の月さし窺く
罪惡世の知るところ
見よや旅順口
立てよ哈爾賓の野に
コサック何ものぞ
醜の夷をはらひ
雪の滿洲に
實にや千歲一遇
例なき義の戰
名に負ふ櫻の國の
宇内に轟かん

珍らしや優曇華の
來れいざ戰はん』
日の本の神の子ぞ
武勇の戈を磨ぐ
唯だ一心四千萬
伏屍海に滿つ』
公道を蹂みにぢり
平和を亂しつゝ
來るや東洋の
飽くなき慾の目に』
神人みな怒る
敵艦また滅ぶ
惠みある日の御旗
天佑われに在り』
よし正義の光もて
東風吹き靡けなん
古今また東西に
奮へわが國人よ』
譽はまた更に
帝國大日本』

太郎さんのコーダック

ひばり

太郎さんの叔父さんわ、太郎さんの所に來る毎に、屹度何かしらお土産を持ッて來ますが、その中でも此度のお土産ほど、太郎さんの氣に入ッたのわ御座いません。そのお土産わ、黒塗の革函に、ピカ〳〵光ッた銀色の金物の着いてる、コーダックとゆう小い〳〵速寫の寫眞機械で御座います。叔父さんわ歸るときに、例の通り

『ぢやア太郎さん、叔父さんわもう歸りますよ。この次に又、叔父さんが來るときまでわ、成るたけ此お土産で遊ぶのですよ。』

と云いました。叔父さんが歸るときにわ、いつでも斯う云いますので、太郎さんわ、其叔父さんから貰ッたものを、お友達に借りに來られて、厭だと思ッたときにも、叔父さんの云ッたことを思い出してわ、貸すようにして居ましたのです。

或日太郎さんわ、阿母さんからお使いを云い附かりましたから、その途中で、何か寫して見たいと想ッて、コーダックを持ッて行きました。段〳〵行ッて、或小さな宅の前に來ますと、お庭に子供が三人居ました。恐皆垣根に倚掛ッて、その內の二人の男の子わ泣いて居ます。

今一人わ、此二人の姉さんで御座いましょう、これも泣きたいようなお顏をして居ました。太郎さんわ、これを見たときに『こりやア面白い、これを寫眞に撮ッて「泣き虫」と名を附けたら如何だろう』と思いまして、直にその仕度をしながら『そうだ、三人泣いてる所を寫眞に撮ッて、お友達に見せたら、さぞ皆者が笑うだろう』と、いよ〳〵面白くなッて來ましたが、よく〳〵考えて見ますと、泣いてる子供達を笑の種にするのわ、餘り酷いし、又泣いてる顏を寫したッて、面白くも何ともありやアしないと氣が着きましたので、寫眞を撮ることわお止めにして、通り過ぎようとしましたが、併し何で泣いてるのかと思うと、打ッちやッちやア置けません。直に門の戶を開けて、中に入り

『君達わ如何したんだ子、何か悲しい事でもあるのかネ。あるなら僕に話し給えナ。』



と太郎さんわ、親切に言葉をかけましたけれども、二人の男の子わ默ッて居ました。

その時姉さんわ、太郎さんを見て、

『私達わ阿母さんが居ないので、淋しくッて堪まらな

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL AWM2020.22.307

いノ。阿父つアんが御病氣になッたので、阿母さんも其方え行ッちまッて子、私達わお隣の叔母さんとこのお世話になッてるのだもの、眞個に淋しくて成りアしないノ。』

と、左も〳〵悲しそうに涙を流しました。太郎さんわ可哀そうで成りませんから、

『泣き給うナ。』

と云いましたが、此とき好い事を考へ附きました。

『まア聞き給へ、僕わ子、阿母さんのお使いに來たんだが、歸りに寄ッて君達の寫眞を撮ッて上げるから、その寫眞を君達の阿母さんとこへ送ッてやり給へ、吃度阿母さんが、吃驚して悦ぶから。』

と、太郎さんのゆうのを聞いて、三人の子供わ大喜悦で、今泣いた顏がニコ〳〵しながら、

『眞個に寫して呉れるノ、ぢやア仕度して待ッて居るよ。』

と云いました。それから太郎さんわ、大急ぎでお使いを濟まして來て見ると、三人の子供わ、外行きの一番奇麗な着物を着て立ッて居ました。眞中のが姉さんで兩端に二人の弟が並んで居ます。太郎さんわ寫眞を二枚撮りまして、

『出來たら、僕が持ッて來て上げるから、阿母さんとこへ送ッてやり給え。』

と云ひますと、三人わさも嬉しそうに、合點〳〵をして居ました。其後出來上がッた寫眞が、三人の子の阿母さんとこへ屆いたときに、病ッてる阿父つアんも、看病してる阿母さんも、大喜悦をしたとゆうお話を聞いて、太郎さんも、太郎さんの阿父つアんも、阿母さんも、

『まア好い事をした。「泣き虫」の寫眞を撮らなくッて善かッた。』

と是れも大喜悦で御座いましたとさ。目出度し〳〵。

敎育の力は唯人の天賦を發達せしむるに在るのみ

福翁百話



國旗

岩野泡鳴作

姉よ、こよひはお伽をやめて、
かの日の丸を切り給へ。
姉よ、こよひは話をとめて、
御國の旗を切り給へ。

父が門出のその日を思へば、
かくこそ語り給ひけれ、
兒らよ、このわれ若し歸らずも、
御國のしるし父と見よ。』

（子拍二の分四調）

| | | |

雛まつり

仰天子

上

今日わ三月の一日で、明後日の三日になつたら、いよ〳〵女のお節句だと、由子わその日の來るのをばかり、待受けて居ましたが、奥座敷わ雛段を拵ねて、その上わ赤い毛氈を敷いたり、雛人形を出して來たり、玩弄の鏡臺や針箱や、その外色々の道具を並べたり爲て、雛祭りの支度を爲て居ます内に、はやお節句の日になりました。

其所で由子わ朝早くから、桃の花を挿した花筒だの、菱餅を載せた三寶だの、白酒を入れた瓶だの、豆煎を盛つた重箱だのを、雛段わ運びまして、綺麗に飾り付けて居ましたが、間もなくお晝前になりましたから、お雛樣わ御膳をお上げ申すのだと、立つてお臺所の方わ行きました。

さて由子の弟の正夫わ、大變な腕白者で、今まで傍

側で水いたづらを爲て居ましたが、もう遊びに倦きて了つて、濡れた手を暴に衣物で拭きながら、奥座敷わ入りました。所が、まだ昨日までわ、道具や何かが出しッ放しに、たゞ並べてあつたばかりの雛段が、大層美しうなつてありますから、つか〳〵と傍わ寄ッて、花や餅や白酒や豆煎を、欲しそうに見まわして居ましたが、やがて正面の雛人形を見上げて、長い間、じッと見入ッて居ます内に、つい口から聲が出て『お雛さん』と呼掛けました。

すると男雛が『はい』とお返辭を爲ました。

正夫わはッと驚きまして『あら〳〵、お雛さんが物をゆうよ』と目を眞丸く爲ながら『お前口が利けるんだね。』

男雛『利けるよ。』

正夫『それわ感心だねえ、ねえお雛さん、この雛段わ今日になつてから、大層綺麗になつたねえ。』

男雛『これわね、坊ちやんの姉さんの由子さんが、朝から一人でやきもき爲て、大變なお骨折で、こんなに見事に飾り立てゝくれたんさ。』

正夫『ぢやア、お雛さんわ、姉さんが好きかい。』

男雛『好きだとも、大好きさ。』

正夫『あたいわ、如何だい。』

男雛『坊ちやんも好きだよ。』

正夫『ぢやアあたい、お雛さんに好い物を見せて上げようよ、見たかアなくつて。』



男雛『いえ、見たいよ、見せておくれな、だが、如何な物を見せてくれるのだね。』

正夫『玩弄の軍艦さ、此間父さんに買ッて頂いたんだが、お雛さんわ軍艦を知つてるかい。』

男雛『いゝえ、私わ一年中、樟腦臭い箱の中わ入れられて居て、この三月のお節句だけに箱の外わ出して貰わるのだけれど、それも

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307

たゞ斯うして、此所に座ッて居るばかりで、何所にも出掛けて行つた事がないから、軍艦なんぞわまだ少しも知らないの。』

正夫『ぢやアお雛さん、あたいと一所に此方にお出でな、見せて上げるから。』

男雛『何所に見に行くのだね。』

正夫『つい其所だよ、あたいの大事の軍艦わ、お椽側の手水鉢に浮かしてあるんだから。』

男雛『そうかね、ぢやア見せて貰ッて來よう。』

正夫わ、今度わ女雛に向いまして『おい、姨さん、お前にも見せて遣ろうよ。』

女雛わ忽ち笑い出しまして『おほゝゝゝゝ、厭だねえ、わたしを姨さんだなんて。』

正夫『そんなら奥さん、お前も序に見にお出でな、一所に連れて行つて上げるから。』

女雛『ぢやアどうぞ、連れて行ッて下さい。』

やがて男雛も女雛も段から下りて、正夫の後に付きながら、椽側の方に出て行きました。

中

由子わ蒔繪の小いお椀や、お平や、お壺や、お皿や何かに、色々の御馳走を盛分けて、それを同じ蒔繪のお膳に載せたのを、行儀よく兩手に捧げながら、お臺所から奥座敷に行きますと、雛人形が一對とも見えませんから、驚いて膽を潰して『あらッ、まアお雛様わどうなすつたんだろう、奇體な事もあるもんだねえ、つい今まで此所に居らしつたんだのに、後の方にでもお落ちなすつたんか知ら』と言いながら、雛段の下を覗いて見て『おや、此所にも居らつしやらないよ、不思議だ事ねえ、一體何時の間に、どうして何所に行らしつたんだか。』

と恰で狂氣のようになッて、手にお膳を持つたまゝ、彼方に行つたり此方に來たり、座敷中を探し回つて居るのです。

すると椽側の方で、小い笑い聲が聞えました。

其所で由子わ、あれわ大方お雛様だろうと、急にお膳を雛段へ置きまして、せか〳〵椽側に飛出しました。

その時男雛や女雛わ、板片で拵えた小い軍艦が、手水鉢の中に浸べてあるのを、さも面白そうに見遣りながら、互に何か話し合つて居ました。

由子わ息を跳ませながら『まアお雛様、あなた方わ何故こんな所に來て被居しやるの、彼方の御殿にお二方のお姿が、見えないものでございますから、わたしわ如何なに心配を致しましたか、これわ飛んだ事が起つたと存じまして、方々をお尋ね申して居



AUSTRALIAN WAR MEMORIAL　AWM2020.22.307

たんでございますよ、さア、わたしがお供をいたします、すぐお歸り下さいまし、お晝の御飯が、持ッて參ッてあるのでございますから。』

正夫わ脇より大聲で『姉さん、可けないよ、坊わ今から、この軍艦の煙筒の穴ゐ線香を立てゝ、そして機械で船が走るのを、お雛さんに見せて上げるんだからさ。』

由子『おや、ぢやア お前がこんな所ゐ、お雛樣をお連れ申して來たんだね、まア惡い正ちやんです事ねえ、これわ姉さんのお雛樣ですよ、お前の勝手にわさせません。』

正夫『だつて、お雛さんにその事を話したら、見せてくれろッてゆうんだもの。』

由子『いゝえ、お雛樣が何と仰しやつても、お前の所で、お遊ばせ申す事わなりません、すぐお連れ申して行きます。』

正夫『そんなこと厭だい、無理にお雛さんを連れて行つたら、姉さんの頬べたを引掻いて遣るから好い。』

ア姉さん、お前わ女だから、この娘さん……ぢやアなかつた、この奥さんの方だけ連れて行きな、坊は男だから、男のお雛さんと一所に、此所で軍艦を動かして遊ぶから。』

由子『いゝえ、そんな事わさせません、どちらも姉さんのお雛樣ですから、お二方ともお連れ申して行くのです。』

正夫わ頭を掉りまして『厭だい〳〵、そんな事をゆうんなら、坊わもう何方のお雛さんも遣らない。』

由子『呆れますねえ、お前のだゝッ子にも。』

正夫『何でも好いやい、お世話にわならないよ。』

この正夫わまだ年が行かない爲めに、身勝手な事ばかりを言張るものですから、何時までも爭いが果てないのです。

下

男雛わ姉の困つて居るのを、大層見難ねまして『これ、坊ちやん、お前そんな無理を言つてわ可けないよ、わたし達わ、もう十分軍艦を見たから、これだけで澤山さ、動く所まで見せて貰わなくつても好いから、すぐ今から、姉さんと一所に歸しておくれな。』

正夫わまだ頭を掉つて『厭だい〳〵、動く所を見せるまでわ歸さない。』

男雛『はゝゝゝゝ、お前わ剛情者だねえ、ぢやア坊ちやん、いッそ斯うして貰をうよ、軍艦わこの水手鉢でなければ、動かないとゆう事もあるまいから、大きい橘盆か何かに水を入れて、それを彼所の雛段の下ゐ置いて、その中ゐこの軍艦を浮かして、煙筒ゐ線香を立てゝ、そして旨く動かしておくれな、わたし達わ、上の方からそれを見物しながら、お晝御飯を頂く事に爲よう、ねえ、そうさえすれば、折角姉さんが拵ゐて下すつた御馳走を、冷く爲ない內に喰べられるし、また坊ちやんが見せようとゆう軍艦の動くのを、見せて貰う事も出來るのだから。』

由子『おう、それわまア飛んだ宜しいお考ゐでございます、ねえ正ちやん、わたしわお雛樣の仰しやる通りに爲たら、大變好いと思うのだが、お前もそれなら

由子『あら、お前わまたそんな亂暴な事をお言いだ、もう今にお晝になるから、お雛樣ね お上げ申す御膳ごしらゐを爲ようと、わたしわお臺所ゐ行つて、そして母さんに手傳つて頂いて、蒲鉾だの、蒟蒻だの、竹輪麩だの、慈姑だの、蓮根だのを煮て、まだ外に温い御飯や、お汁や何かを付けて、大急ぎで持つて來たんですのに、お前がそんな事を言つて、邪魔を爲ておくれだと、折角拵ゐた御馳走が冷くなつて了いますわね。』

正夫『冷くなつたつて好いやい、どうせ蒟蒻や竹輪麩わ、温くつても旨くわないんだ。』

由子わもう正夫なんぞを、相手に爲てわ居ないで、默つて雛人形を連れて行こうと、ずッとその傍ゐ寄り掛けました。

正夫わ直に兩手を披げて、通せん坊をするのです。

由子わ到頭癇癪を起しまして『小面の憎い正ちやんだねえ』と言いましたが、もうその聲わ泣聲で、そして目に涙を浮べて居ます。

正夫わそれを見て、少し氣の毒になりまして『ぢや

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL AWM2020.22.307

好いでしょう。』

正夫わ始めて頷きまして『むゝ、坊だつて夫なら好いよ、軍艦の動くのが見せられりやア好いんだ。』

由子『おやア、早くそうお爲よ。』

正夫『だから姉さん、お前お臺所の擂盆に水を入れて、彼所ゐ持ッて來ておくれな、坊わこの軍艦を持ッて行くから。』

女雛わ傍から『おほゝゝゝゝ、坊ちやんよう〳〵御機嫌が直りましたね。』

まづこれで市が榮ねました。

水泡船

田中花朗

一

水泡と太郎

春の夕方、ぼか〳〵暖い日が山の端に傾いた時、ある河の淵に、年古くから棲んでゐる、一疋の大鯉が、突然ばちりッと跳て、暮の霞に鎖されてゐる水面を、高く二三尺も威勢よく躍り上り、沈みては浮き、浮上つてわ沈み行き、尾を振り、鰭を動かして、さも樂しげに戯れて居ました。

如何した機會か、見るから、弱々しい水泡が一つ出來まして、瞬く間に、部厚く、大きくなり、不思議にも目鼻すぐれた可愛らしい顏が出來、足も手も、ちやんと五體が揃いました。

『何だい、青い事ッたら、可笑しな處だな。』

と水泡わ目をぱちくりさせて、蒼い水、紺青の空、翠の若草を眺めて、不思議そうに眉を顰めて、水のまにまに、瀨に誘われて、ズン〳〵下流ゐ流されて行きました。其間絶えず四邊に目を注いで、誰かよい話相手わなかろうかと思つて居ました。

折から水泡わ、網代木にからまつて、餘り急いで流れて來たものですから、身體が少しばかり苦しくなり、足も疲れたので、呼吸を入れてゐますと、不意に水が搖れて、ピユッと稻妻よりも早く、燦々光つたものが空の方ゐ上つて行きます。思わず堤の方を見ますと、

十一二の丈夫そうな坊ちやんが、釣竿を片手に持つて、呢と瀨に目を注いでゐるのです。



水泡わ、あゝ好い話相手が出來たと雀躍して、遠慮會釋もなく、水の中から、

『おい君、坊ッちやん！』と、聲をかけましたので、坊ちやんは驚いて『誰だい』と返答しますと、水泡わ『誰ッて僕だ、水泡だ、網代木にからまつてゐる水泡だ……。君わ何とゆう名だね。』と猶且遠慮なく話しかけますから、坊ちやんわ、少々恐ろしく思ひましたが、水泡の言語附が何となく可懷げに聞ねますし、根が豪氣の坊ちやんですから、少しも憶れず『僕わ人間だ、石川太郎とゆう者だが、何か用事でもあるのか？』と確乎答えますと、水泡わほく〳〵喜んで『石川君！太郎君！僕の親友に成つてくれ給いな。ね、君。太郎君！』と繰返して頼みますので、太郎もやつと承知致しました。

太郎わ兼て、この川續の海に一疋の毒蛇がゐて、屢々船を轉覆したり、人間を殺したりするので、何日か折があつたら退治してやろうと思つてゐました。で、慫うして不圖、水泡と親友になりましたので、直樣自分の思慮を話しますと、水泡わ大喜び『そりや面白い、愉快だ、行り給い、大に行り給え。僕わ出來るだけ君を扶けて、立派に

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL AWM2020.22.307

毒蛇を退治させてあげるから……。併し大海に乗出すにわ船が入用だ。それも通常の船でわ、轉覆される恐があるから、よし僕が一番船の代りに成つて、君を乗せて行こう。』と健氣に申しますので、太郎わ初めわ、水泡のゆう事を疑いながら聞いてゐましたが、怎く物語る中、おのづと勇氣と熱心が眉宇に表われて來まして、到頭明日を約束して、其儘家え歸りました。

二　毒蛇退治

太郎わ洋服裝で、海軍帽を被つて、腰にわ確と九寸五分の短刀をさし、片手にわ糧食、片手にわ雨具とステッキを提げ、左の肩から斜に、右の脇腹え雙眼鏡を掛け、節面白く、軍歌を歌いながら、勇み勇んで、夜がやつと明け、東がほんのり白んだ頃、例の網代木の傍え急いで來ますと、突然に『太郎君か、大層早かつたね。』と聲を掛けたのわ、彼の水泡でございます。只見れば、千、萬、億と數知れぬ水泡が寄集まつて、何れも強そうに、雪よりも白く、一種の光を持つて、見るから丈夫そうな、面白い水泡船！

太郎わ直樣飛乘りますと、漕ぎもせぬのに、水泡船わひとりでに、ふわり〳〵と下流え流れて行き、そよ〳〵と風の吹く毎に、船足わ一層早く、その心地よさゆうものわ、太郎が生れてから、這麼事わ遂ぞなかつたのでございます。

風が吹くに連れ、帆を造ねたら、あぞ船が早く進むだろうと、太郎わ試に、流れてくる竹竿を拾つて、その先端え又、十文字にステッキを縛り付け、倒れぬ樣に四方から網を引いて、其所へ洋服の上衣をかけますと、帆の樣に風が孕んで、船わ矢を射る如く流れて行きます。

太郎わ、手を扑たぬ許りに喜んで、四邊を眴わしますと、岸にわ霞のような櫻が咲き、田にわ黄金のような蠻苔が呑い、向うにわ岩が峙ち、白帆が見え、その景色のよい事、恐らく太郎わ這麼よい景色を見たのわ、今日が初でございませう。

やがて正午過ぎに、大海の眞中位までまゐりましたから、御飯を食べて、ちよつと休んでゐますと、不意に

醒い颶風が吹き、空わ一面墨を流した樣に黑く、大浪小浪わ、茶碗の水を搖動かしてゐるように、激しく搖れ出しました。

『好敵御參なれ。』と太郎わ、身の廻りの仕度をして、船の中を片付け、きつと海上を睜めてゐますと、折から風が益〻益加わり瞬く間に篠つく雨が降出しまして、浪わ荒れて山よりも高く、何うやら船ぐるみ太郎をも呑込みそうでございます。併し、水泡船の重寶な事にわ、甚麼に大きな浪をかぶつても、にゆッと向うに漂う許り、甚麼に風に吹かれても、ふわりと一間位流される許りで、少許も害を受けません。



少許すると、附近が眞黑な暗になり、一尺向うわ見わぬ位になりました。太郎わビクともせず、尙も目を睜つて水上を眴わし、短刀の鯉口を濕して、すわと云わば、切ッてかゝらんず身構で、靜に控ねてゐますと、遽に海水が大山の樣に高まつて、目を射る樣な光が射したかと思うと、二丈許りの蛇が、鐵の樣な鱗を逆立て、牙を剝出し、燄を吐いて、今にも一呑に太郎を呑みそうな氣色でございます。併し、勇壯豪膽な太郎わ、すこしも恐れず、這麼凄まじい、恐しい樣を眼の前に見れば見る程、勇氣が增して來まして、晃々光つた氷の樣な短刀を振り上げ、一擊に退治して終をうと、身を摺寄せますと、燄の毒氣に觸れて、一步も踏出し兼るのでございます。

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307

如何すれば好いかと、切りに急つてゐますと、不思議な事にわ、船の周圍の水泡が、飛散る樣に、蛇の眼前に立塞がり、絶ね間なく吐く毒氣を、太郎の身體に障らせない樣にしますし、又頭となく、手となく、足となく、太郎の身體一面にくッ附き、將に毒蛇に呑れそうな太郎をかばつて、凛々しい太郎の身體を、まるで水泡の樣にして了いました。

併し、顏にも水泡がくッ附き、手にも水泡がへッ張り附いてゐますけれど、如何した事か、太郎わ身體に少しの異狀を覺ねず、目の動き、身體の擧動わ、少許も平素と異りません。

それとわ知らず、毒蛇わ太郎の姿が隱れたので、後え向き直つて牙を剝出し、四邊を睨む樣に見廻してゐます。その空隙に、太郎わ身をすり寄せ、骨をも貫く許り強く、背に切付けましたが、毒蛇わ痛手に屈せず、向き直つて、太郎を呑まうと致します。太郎わ又其空隙につけ込んで、滿身の力を込めて咽喉を一抉り突立てましたので、さしもの毒蛇も、敢えなく呼吸を引取り、太郎わ大巧名を顯わして、勇み喜びながら、家に歸つて參りますと、いつしか近隣の村に噂が立つて、川尻の網代木の近傍にわ『石川太郎君萬歲』又わ『祝石川君凱旋』などと色々の、幟やら旗やら國旗やらを押立て、大勢の人々がやんやと囃し立て、やんやと賞め贊ねて歡迎してゐます。太郎も思い掛けない面目を施し、目出度く上陸して、さて水泡船にお禮を云をうと、ふり返えつて見ますと、ぼうつと煙の立つ樣に白くぼやけたかと思う途端、水泡わ影も形もなく消えて了いました。

三　水泡の霞

太郎が毒蛇を退治してから此方、此所界隈でわ、誰一人太郎の勇氣を知らぬ者わなく、皆々太郎を強い、豪い子だと賞めてゐます。

一日、只ある山奥の獵師が五六人、太郎を尋ねて來まして『私共わ山奥の獵師でございますが、この山にわ年古くから住んでゐる一疋の羆がありまして、毎年今頃になると、人を殺したり、牛馬をも殺しますので、

私共わ力を合せて打取ろうと、去年の冬から急つてゐますが、手答が有つても、羆の皮が厚くつて鐵砲が入らず、如何しても打止める事が出來ません。で、何うか強い貴方にお願い申して、退治して頂こうと參つた譯でございます』と、恐る〳〵丁寧に賴みますと、太郎わ直樣承知して、獵師を案內に立てゝ、ずん〳〵山に登つて行きました。



時節わ早や春の初でございますが、山の中わ未だ雪が積つて、寒氣わ骨に泌みこみ、肉を劈かるゝ思が致します。其上針で刺れる樣な風が冷々と吹いて、勇氣を出して歩いてゐるものゝ、身體わ凍ねる樣に冷ね、案內の者ごもわ、一歩も前に進むことが出來ませんので、もう此所から歸りましようと申します。併し太郎わ、此位の寒氣に勇氣を挫く樣な弱いものでわございませんから、案內の獵師と分れて、勝手の知れない山路ながらも、雪や枯草を掻き分け、腰にわ例の短刀を挿し、葛に攀ぢてゐる處ね行くにわ、何う行けば好いかも分りません。太郎わ途方にくれてゐますと、頭の上で『太郎君』と自分の名を呼んだ樣な氣がしました。

太郎わ仰向いて見ますと、煙の樣な霞が一面空に靉靆き、其霞の中から聲が聞える樣に思われますので、靜に耳を澄ましてゐると、果して其霞が『太郎君、僕わ水泡だよ。水泡が、そうとう霞に成つちやつたんだ。』と申しましたので、太郎わ岩を越したり、川を渡つたり、崖を飛下りたり、色々な難儀をして、やつと小さな雜木が一面に生ねてゐる處ね來ました。が、この雜木林わ際涯もない位廣いので、前ね進む事も、後ね歸る事も出來ず、まして羆の棲んでゐる岩が重り合つてゐる處ね行くにわ、何う行けば好いかも分りません。太郎わ途方にくれてゐますと、頭の上で『太郎君』と自分の名を呼んだ樣な氣がしました。

太郎わ仰向いて見ますと、煙の樣な霞が一面空に靉靆き、其霞の中から聲が聞える樣に思われますので、靜に耳を澄ましてゐると、果して其霞が『太郎君、僕わ水泡だよ。水泡が、そうとう霞に成つちやつたんだ。』と申しましたので、太郎わ

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307

何となく氣丈夫になり、思いがけない味方を得ましたから、前よりわ千倍も勇氣が增し、羆の退治を賴まれて、今しがた道に迷つて難儀してゐる次第を話しますと、水泡の陽炎わ皆まで聞かずに、『僕が教えてあげるから、僕の上に乘つかり給え。』と申しますので、太郎わひらりと霞の上に乘りますと、丁度翅が生えた樣に、空を駈ける思がする樣に、霞わ只ある方え走つて行き、屏風の樣な岩が重つてゐる處に參りました。

四　岩中の羆

早や日わくれて、寒そうな弦月が、岩の上の雪を照らし、見渡す限り涯限の無い氷の世界、雪の邦でございます。太郎わ岩に腰をかけてゐますと、少時して風が激しく吹き、氷と凍つた岩につもつてゐる雪わ、風にあをられて、餓毛の散る樣に飛び散り、岩間の茅に風が音ずれて、ばさ〳〵〳〵と心膽を抉る樣な音がするかと思う間もなく、五六間向うに、大きな羆が牙を剝出し、爪を立て、毛を逆立てゝ、見るから凄い、恐ろしい顏をして、月を浴びてぬつくと佇立つてゐます。



羆わ我ながら岩角で、したたかに鼻柱を打つて、其儘眞倒に深い谷底に轉げ落ちて了いました。

谷底わ岩又岩が重なり合い、丁度劒を伏せた樣に尖つてゐるのです。今しも羆わ、這麼所に陷落ちましたので、身體一面に傷を負いましたが、傷を負えば、負うだけ荒れ廻り、猛り狂い、牙を剝き、毛を逆立て、山やら谷やらを震動させる樣な、恐ろしい吼聲を擧げて、岩を攀ぢ登ろうと死物狂に成つてゐます。四邊の雪わ、淋漓と滴る血に染つて韓紅となり、吼える度に、醒い風が谷から吹上り、太郎の樣な小さな身體のものわ、又しても吹飛されそうでございます。併し太郎わ泰然として心地快げに、羆の狂い猛る樣を見てゐますと、間もなく羆わ、身體が疲れたと見れ、雪の上に血だらけの身體を伏せて、今度わ悲しそうな聲を立て、半死半生の有樣に倒れて了いました。時分よしと太郎わ、霞に乘つて谷底に下り、難なく惡い〳〵羆を退治して了いました。

五　鳥の哀訴

羆を退治して少時すると、夜が明けて旭日が照り輝きましたから、太郎わ刀を收めて、霞に乘つて、日が出てゐる方に參りました。すると、四季色々の花が香い、赤、黃、紫、淡紅、白などの花が、五彩の玉かと許りに咲いて、何れも水

一目羆を見た太郎わ、短刀を抜いて、飛鳥の如く飛びかかつて、一刺に衝殺そうとしましたが、早くも羆わ人の樣に立上つて、手を廣げ、胸をつき出して、太郎に喰つてかゝろうと、ずん〳〵進んで來ますので、太郎わ詮術なく、退くにわ岩の上の事とて思ふ儘に行かず、進んで羆を仕留めようとするにわ、却つて此方の命が危うございますから、どうすれば善いかと、豪膽な太郎も有繋に困つてゐました。すると、水泡の霞がぼうつと靄靄き、今迄あり〳〵と羆に向つて、刀を振り上げて居た太郎の身を隱して了いました。で、羆わ呆氣にとられ、首をふつて四方を瞻わして居ります。

太郎わこゝぞと、力を込めて羆の腹となく、顏となく、手當り次第に衝刺し、切立てますと、丁度鐵でも切つてゐる樣に、唯かちりと音がする許りで、甚麼に滿身の力を振つても皮を衝刺すことが出來ません。

羆わ激しく衝き立てられるものですから、一生懸命に防いで、右の方を引掻き、左の方に嚙附き、太郎を殺そうと急つてゐますが、肝心の太郎の姿が霞に罩められて隱れて居ますから

品の様な、露の小玉を宿して、其美しさわ五色の珠玉を見てゐる様でございます。それのみか、翠の嫩い延々した草が、毛氈を布きつめた様に生ひ、白い小石の上を水銀の様な水が静に流れ、流れる毎にせせる音が、丁度奏樂を聞いてゐるようでございます。

太郎わこの景に見惚れて、霞から降り、若草の上に佇立んで、四邊の何とも云ひない、美くしい景色を賞めてゐますと、遙か向うの花園で、何かがやゝ〳〵した響を聞きました。

何かと不思議に思つて近寄つて見ますと、綺麗な花が咲いてゐる中で、鶯、目白、鳩、雀、鳥に鵯、四十雀に燕、孔雀やら、文鳥やらが、何れも心配そうにチユ〳〵カア〳〵噪を集め首を傾けて何か相談をしてゐるのです。



之を見た太郎わ、何うも不思議な事だと思つてゐますと、孔雀がつか〳〵と進み寄り、恭しくお辭儀をして『私共わこの花園に棲んでゐる鳥類でございますが、向うの杉の森に、雌雄の鷹が棲んでゐまして、毎日〳〵私共を苦しめ、日に四五疋も引裂かれて終いますので、怎うしてわられないと、懐かしうわございますが、今しがた、棲馴れた花園を立退こうかと相談をしてゐたのです。其處に勇ましい貴方のお姿が見にましたので、其鷹を退治して頂きたいのでございますが、どうか私共を不愍と思召して御承知なすつて被下まし』と、頼みますので、根が勇氣に富んでゐる太郎わ、直と承知致しました。孔雀わ喜悦の涙をこぼして、『鷹奴わ、すばらしい強い奴で、眼の鋭い事と云つたら、一里前のものも見にゝ、薄の根に竊んでゐる蜘蛛までも分る位でございますから、お退治なさるにも十分お氣を注けて被下まし。』と云いながら、矢と弓とを太郎に渡しました。

太郎わ、孔雀に貰つた弓と矢を持つて、前の様に霞に乗つて、身を霞で隠して、杉の森に來ますと、鬱然とした古杉の枝と枝とが重り合い、丁度紺青が漂つてゐる様な處に、二匹の大鷹が刃の様なぴか〳〵した眼を輝かして止まつて居ますから、太郎わ占めたぞと尚も間近く進みました。併し、鷹は霞に包まれてゐる太郎の身體が見にませんから、恐るべき大敵が間近にゐて今少時の間に、恐ろしい矢が飛んでくるとわ、夢にも思つて居りません。

『憎くき奴、思い知れ。』と太郎わ、弓に矢をつがい、満月の様に引搾つて、鷹の咽喉首目がけて、ヒユウと放ちますと、矢わ流星よりも早く、うなりを發して、慥に手答が有つたと思ひますと、鷹わ一矢で脆くも、倒れて地上に落ち、苦しげに羽叩きして、其儘死んで

了いました。

不意に矢がとんで來て、雌の鷹が死ましたので、雄の鷹わ大層怒つて、血走つた目を瞋つて、四邊を隈なく眴わしてゐましたが、自分等二疋の外に、一里向うにも、近くわ勿論、何處にも彼處にも、誰一人居るものわなく、況して自分の敵讎も見にませんから、張合が抜けた氣味で、悲しげに飛下りて、雌の鷹の死骸の横に悄然として立つてゐます。

其れを的に太郎わ、更に第二の矢をつがい、難なく惡い鷹を二匹とも退治して終いました。

斯くて太郎わ、前後を鳥に取巻かれて、樂隊にも勝る囀を聞きながら、霞に乗つて山里に着きますと、獵師等も、旗やら幟やらを立てゝ、恭しく出迎い、はてわ鳥に混つて、『石川太郎君萬歳』、『水泡の霞君萬歳』と勇ましく太郎を送つて村の方に參りました。

めでたし〳〵。

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307

蜘蛛の話

理學博士　渡瀨庄三郎

往昔、支那に王守乙といふ奇人があつて、藥を洛陽の市に賣つて居たが、常に杖を携へて、蜘蛛の網を見れば、必ず破つて了つた。或人がその故を問ふたら、守乙の云ふには、天地の間生きとし生ける者、皆口と腹との爲めに、空をかけり地を走り、勞苦して生命を養ふのに、獨り蜘蛛のみは、巧に網を張つて、居ながら物の命を害す、我是れを惡むに依つて、蜘蛛の網を見れば、必ずこれを破るのであると、云つたさうですが、日本でもその主義を得たものか、左に記すやうなことが、古書に見える。

『凡そ世中に生きとし生けるもの、各々いとなむわざありてこそ、身の養ひは得れ、人の上にていはば、士は仕へ、農は耕し、商はひさぎ、工は造る、物の中にも、馬は載せ、牛は負ひ、犬は家を守り、猫は鼠を追ふ、皆其つかさどることありてこそ、人の養ひをも得れ、蜜蜂は、春の花の露を採りて、秋冬の食となし、群蟻は、暑中に糧をあつめて、雪裏の用に供す、其餘かゝる事なきも、各身を養ふいとなみありて、妄に物の命をそこなひ、己が養ひとするはなし、たゞ蛛ばかり、さあらずして、窓蔀庭の梢までも、誰へ告げて、誰の許を受けるともなく、所せきまで網を張り、往來の虫をなやめくるしめ、命を取りて己を養ふ、身は肥えふくれ、われは顏なる風情、誰が汝を惡まざらん』云々。（蟲の諫、寶暦十二年刊行）

併し、公平に考へて見ますと、蜘蛛が巧に他の蟲を捕へて食ふから、誠に殘忍惡虐だと云ふのは、人間の口から云はるべきことで有らうか。釣や、網や、鐵砲や、爆烈藥を用ゐて、巧に鳥獸魚介等を捕へて、常にこれを食料に供し、或はこれを慰にしつゝある人間は、蜘蛛の目から見れば、如何に見ゆるであらうか。人類位、貪婪飽くを知らざる動物は、他にあるであらうか。

人間なり蜘蛛なり、各この世に生れて出た以上は、



田中私才圖製版

鳥を捕る大蜘蛛

生活に必要なる食物は、是非とも他の生物の命を奪うて、これを繋ぐより他に手段はないので、人類社會のごとき一小天地に起つた、善とか惡とか云ふやうな標準を以つて、自然界の現象は律すべからざるものである〳〵偶々蜘蛛が、他の蟲を捕ふるのを見て、これを貪慾の化身の如く云ふは、自身の行爲を棚に上げて置くものと云ふべきである。

吾人は、蜘蛛の惡口を云ふ權利を持たぬのみならず、彼等に向つて、大にその恩を謝さねばならぬ理由がある。それは吾々は、生の蜘蛛を珍味として食ふ、マダカスカル島の人民でないから、その點に於て、敢ておれを申すには及ばぬが、吾々人家の附近に住む蜘蛛は、蠅や蚊を澤山に捕へて呉れる。吾々は夫れが爲めに、大に蟲類の襲撃を免かれて居る次第である。試に室内にある蜘蛛の巢を見よ、蠅や蚊の翅や、屍骸が澤山かかつてあるではないか。又其巢の下を見ると、裂れた足や何かゞ落ちて居るではないか。又室外に於ては、一層盛んに吾人を惱ます、蠅や蚊を退治して呉れるではないか。そして蜘蛛は、一夏中に捕へる蟲類の莫大なるに關せず、人間に向つて是れと云ふ、直接の害は加へないのである。偶々不注意に、蜘蛛を撮んで噛まれる事があるが、恰も蚊に刺された位のもので、一向恐れるには足らない。尤も、塀や垣根に、蜘蛛の巢の澤山掛つて居るのは、餘り外觀のよいものでもないが、併し蚊いぶし、蚊張、蠅取もち等と共に、蜘蛛の巢を一種の驅蟲裝置として考へて見れば、それ程腹も立てまいと思ふ。

もう一つ、蜘蛛の有益なることは、其糸の誠に細くして丈夫で、且つ其太さに著しい變化のないことである。今日の如き色々の發明の多い世の中であつても、未だに蜘蛛の糸のやうな、立派なものは出來ない。測量器械や、望遠鏡や、其他物理學の實驗には、蜘蛛の糸は今日盛んに用ゐられて居る。實際糸としては、蠶の糸よりも遙に丈夫である。それは去年の秋、垣根や木の間に掛けられた蜘蛛の巢が、冬間風雨に曝されたにも係はらず、今年の春、まだちやんとして殘つて居

るのを見ても解るので、實際世界の或國に於ては、蜘蛛の糸を、縫仕事に使用する所がある位である。それであるから、古昔より歐米の學者中には、蜘蛛の糸を利用して、蠶糸と並び用ゐやうとしたのは屢々の事であつた。殊に伊太利、西班牙、佛國、米國の學者中には、度々試驗をやつたことがある。又伊國人は、蜘蛛の糸で、手袋などを拵へた人もあつた。殊に佛國の政府では、嘗て委員を置いて、蜘蛛の人工飼養法を研究させた事もあつて、彼の有名なレヲムルと云ふ學者も其委員の一人として、これを研究した事があつたが、別段良い方法を發見することも、出來なかつたと見える。

それで段々、其失敗の重な原因を調べて見ると、蜘蛛の天性は、到底蠶兒のやうに飼はれることを容さない。蜘蛛は肉食動物であつて、群棲を忌むものである、成長した二疋の蜘蛛は、決して同じ巢に棲むことは出來ない。只一所に居るのは、母蜘蛛が幼稚なる子蜘蛛を撫育する時だけで、それもホンの一時の現象である。夫婦の中でも同じことで、大概雄は、雌に食はれて了うのである。雌は體が大きくして、力が逞しく、雄は小にして、殆ど同種類の動物とは見えぬ位である。夕暮に庭前に巢を掛けるものは、雌であつて、雄は雌に比すれば、至つて小さな者で、往々雌の巢の一隅を借りて、そこに誠に規模の小さな巢を作つて、小心翼々として雌の怒に觸れんことを恐れて居るものである。甚しいものになると、先づ雄蜘蛛を人間位の大さにすると、其雌は六十尺から七十尺位の長さのものにせねばならぬ。又體量から云ふと、雄は雌の千三百分の一位にしか當らぬ。或學者の説によれば、雄が斯くまで身輕に出來て居るのは、雌に追驅けられた時に、はしこく逃げ廻るに、都合のよい樣な便利の爲めに、段段とさう云ふ風になつて來たのだとの事であるが、もう一つは、成るべく雄の體を小さくして、喰ふても喰ひ出のないやうにして、雌の食慾を誘起せぬやうにする、便利があるかも知れぬと思はれるのである。何れに致せ、蜘蛛は夫婦の中でも、此の如くであるから、

まして他のものと一所に置くことは出來ぬ。人工で多くの蜘蛛を、飼養することは到底出來ぬ。第一に其餌に困まり、第二、一疋一疋の蜘蛛を別々に養ふと云ふのは、手間許り掛つて仕方があるまい。それさへ出來れば、實に立派な糸が取れるが、これは中々の難問題である。

併し、この實用問題は別として、蜘蛛の生活には、實に面白い點があつて、一寸庭前へ出ても、數種の蜘蛛を發見するを得るのである。また春から冬の初めまで、何時でもこれを見ることが出來る。殊に秋は、各種の蜘蛛が充分成熟した時で、一年中の全盛を極める時であるから、その季節には少しく注意して、觀察して見たらば如何であらうか。

此處に圖に示したのは、その名を、ブロニス／エパイラーと云つて、蜘蛛の內では、世界中最も大なる種類である。即ちその大さは四五寸許りに達し、形は蠅取り蜘蛛に似て、全身多くの毛を生じてをる。ブロニス／エパイラーと云ふのは、鳥を取る蜘蛛といふ意味であるが、其名の如く、ときゞ〳〵小鳥を捕獲して食ひ、又は蜥蜴等の蟲類を餌食として居るのである。又この蜘蛛は、普通の蜘蛛のやうに巢を張ることなく、毎に地上に匍ひ廻つて、運動は中々活潑であります。圖は南亞米利加に產するものに依つて寫したのであるが、また一種濠州にも棲んで居る同樣のものがあります。

犬の足跡

はうめい

雪は積む、積む。
小犬よ、走れ。
走る足跡
消え行くとても、
枝にいち輪
にほひぞ高く、
咲きも出でたり
かの梅の花。



エスキモー人種

松村瞭

今年の冬は、實に激しい寒さで、年寄つた人々も、つゐぞ身に覺えなき程であると申して居りますが、まだまだこの位の寒さは結構なので、廣い世界の中には、それは〳〵日本よりも幾十倍か寒い所、然かも年が年中、寒い時ばかりの土地に生活して居る者もあるのであります。

そこで、世界で最も寒い土地は、何處であるかと申しますと、皆さんも御存じの通り、地球の極々の北か、左もなくば極々の南で、其他はヒマラヤ山のやうな極く高い山の上であります。それで今日分つてゐます所では、エスキモーと申す人種が、人類中で最も寒い土地に住んで居る者でありまして、其住所は何處かと申しますと、北アメリカの北、氷海に面する一帶の海岸並にグリインランドと申して、北極に近い所に大きな陸地がありますが、其陸地の海岸にも住んでゐます。

この陸地は南の部分でさへ、かなり寒い所であるのに、そのズット北の北緯八十一度と云ふ最早や九度で、北極に達しやうとする所にまで分布つて居るとは、實に驚くべき事ではありませんか。皆さんも御承知の通り日本の版圖内で、一番北方に位する千島の占守島ですら、漸く北緯五十度程であります。然らば寒暖計で其温度をいふと、どの位であるかと申しますと、グリインランドの中央部の九月中旬の温度が、攝氏の氷點以下三十四度と云ふひどい寒さなのであります。千島占守島の氣候は分りませんが、北海道で一番寒いと申されてゐる上川の九月中の平均最低温度は、攝氏の九度で、一年中にて一番寒い時でも、平均は攝氏の氷點以下十七八度であります。此れで御覽になつても、此人種の住んでゐます土地は、如何に寒いかがお分りになりましやう。こんな人間の事を思ひますと、我々日本人は、實に結構な土地に生れ合せたものと喜ばなければなりますまい。

さて、こんなひどい寒さの土地に住まつてゐる人間はどんな人で、どういふ樣子をして生活してゐますか、此れから少しお話しやうと思ひます。

このエスキモーと申す人種は、日本人に似てゐるか、ヨウロッパ人に似てゐるか、それとも黒奴の樣な人であるかと申しますと、まあ日本人に近い方で、頭髪は黒く眞直で、顏は平たく、頬骨は出てゐまして、身長は餘り高くない方であります。こゝに一つ皆さんに注意して置きたい事は、この人種の身長の事でありますが、能く世人は小人の例にこの人種を持出しますが、此れは大きな誤りであります。私も小學校や中學校にゐました時には、先生からエスキモーといふ人間は、身長が低いと教へられましたが、此れは決して先生の教へ方が悪いのではなく、最初にエスキモーの事を書いた書物が悪いのであります。皆さんもお氣がつきになりましやうが、衣服は其仕立方で、同じ人を大きく見せたり、小さく見せたりするものですが、エスキモーの衣服は、一見身長を低く見せるやうな拵へ方でありますから、初めて彼等を見た人が、實際その身長を測りもせずに、目分量で書いたものですから、こんな誤を傳へるやうになつたものと見えます。然し其後學者が彼の地に行つて、實地に尺度で測つて見ました所が、中々小さい所ではなく、地方によりますと、我々日本人などよりは高い者があつて、大勢の大人を測つて其平均尺を出しますと、五尺三寸七分もあります。日本人の平均尺は、先づ五尺二寸五六分の所でありますから、日本人の口からはエスキモーは身長が低いなどと云へたものではありません。此やうに此人種は、決して身長の低い人間でないと云ふ事を、よく〳〵御記臆下さるやうに願ひます。こんな寒い土地に住んでゐるのですから、實に〳〵生活に困難な事であらうと察せられます。が、此人種は中〻巧みな事をして、愉快氣にその日を暮らしてゐます。先づその家の拵へ方からお話しますが、家は地方によつて一樣ではなく、或所ではヨウロッパ人に接しました結果、一寸した板屋を建てる者もありますが、或地方では地面へ丁度擂鉢を埋めたやうな大きな穴を掘つて、その上に恰も饅

頭笠を伏せたやうな形に、よい加減の大きさに切つた雪の塊を、煉瓦を積むやうに重ねて屋根を造り、その一方に入口をつけるのであります。尚ほ屋根の一ヶ所に孔を明けて、眞水へ張つた氷を取つて其孔へはめ、丁度我々のガラス窓のやうなものを造ります。中々よい考えではありませんか。こんな雪の家では、永い間には溶けてしまうであらうとお考へになる方々もありませうが、此地方では此れを溶解する程の日光が映りませんから、大丈夫なのであります。併しそれにしてもこんな寒い土地では、火をドン〳〵と焚いて暖氣を取らなければなるまいから、さすれば雪の家はどうしても溶けてしまうだろうと云ふ御質問は、その次ぎにお考へ及びになる所でありましやう。此れは御尤の次第で、若しこの家の内で、盛んに火を焚いたならば、忽ち溶けてしまうでありましやうが、習慣と申すものは、實に不思議千萬なもので、こんな寒い土地に住まつてゐる者でも、馴るれば左程寒さを感じないものと見えまして、家の内では火と申す程の火は用ゐません。僅に皿のやうに凹んだ柔かい石へ、苔を燈心とし、鯨又は海豹の脂を石油の代りとして、火を點する所の一種のランプを使用するばかりであります。で、家の溶解するやうな事はありません。このランプは、この人種に取つては實に大切なもので、此れを明にもすれば、身體を暖めもし、衣服の濡れたのを乾かしもすれば、又氷を溶かし、或は食物を煮るにも使うと云ふやうに、中々用途は廣いのでありますから、生活上一刻も缺く可からざるものであります。こんな譯で、一家の主婦たる者は、その火の消えないやうに、常に心掛けてゐなければなりません。固より我々が用ゐますやうなマッチがあれば、火が消えても次に此れを起す事は容易い話でありますが、マッチなど申す便利なものはありませんので、木と



木とをこすりつけて、火を起すのですから、實に困難なのであります。

次は衣服ですが、男も女も海豹の皮で拵へた筒袖の上衣に、同じ皮の股引をはいて、此れへ長靴をはくのであります。その仕立方は、男のも女のも能く似てゐまして、上衣の丈の女の方が長い位が、違つてゐる點であります。そして上衣には外套の頭巾の樣に、頭全體を入れる事の出來る袋、詰り頭巾がつけてあります。此頭巾が女のは非常に大きいのですが、此れは小供を其内に入れるやうになつてゐるのであります。

食物は主に海豹、馴鹿、鯨の類であつて、前にお話しましたやうに、極く火力の弱いランプが一つあるばかりですから、食物は大抵生で食するのであります。此等の食物をとつたり、衣服を作る材料を集めたり、又油を得たりするため、日常男は狩獵をしたり、漁獵をしたりして暮らしてゐるのですが、其業は中々巧みなものであります。今その漁獵の事を少しお話しますと、此人種にはカヤックと申す一種のボート、其れは

長さが十八尺、幅が二尺程の細長い舟で、木や鯨の骨で組立てゝ、此れを毛のない海豹の皮で水の入らないやうによく包み、其眞中へ丸い穴をあけて、そこへ人が乘れるやうに造つた舟があります。此れは非常に輕いもので、片手で運搬される位の目方で、これへは人一人と二十四貫目程の荷物を乘せる事が出來るのであります。そうして此ボートへ乘るには、水の透らない特別な衣服を着て、舟が轉覆しても水が舟の內へ入らないやうな工合、譬へて申せば丁度瓶の口にコルクをはめた樣な風に、身體がキシッと穴へ合ふやうな準備をして乘るのでありまして、こんな輕い小さな舟でも大海へ乘り出して、魚や海獸を捕へるのであります。何とえらい事ではありませんか。そうして魚や海獸を捕へるのは、大概銛か投槍を用ゐるのであつて、銛の場合には、其銛を鯨なり海豹なりに目掛けて投げつけ、うまく當つた時には、その銛の柄を斜に引きますと、銛の頭丈け先方へ殘りますので、又其もりの頭には、最初から長い紐が結びつけてありますから、紐さへ持つてゐれば、遁げられないやうになつてゐるのです。それからズット大きな銛になりますと、紐の一端に浮嚢が結びつけてあつて、手をはなしても、浮嚢の動き方で、銛の刺さつた鯨や海豹が、どつちの方へ向いて參りますかゞ、能く分るから、この度は投槍でこれを殺すのであります。其他エキスモーは楫を用ゐたり、骨へ畫を刻んだり、中々器用な事をいたします。エスキモーは野蠻人だなどと申す人が、よくありますが、中々それ所ではなく、今お話したやうに、至つて巧なことをして生活してゐるのであります。廣い世界の內には、隨分面白い人間も住んでゐるもので、こんな寒い土地によくも住まはれたものと驚くの外はありません。

敎育の要は人生の本來に無きものを造りて之に授くるに非ず唯有るものを悉皆發生せしめて遺すことなきに在るのみ　福翁百話

潛航艇と潛水艇

嶂峰

この潛航水雷艇と云ひ、また潛水々雷艇と云ふのは、近頃に至つて發達した海軍の武器で御座います。尤も之が計畫は、初め前世紀の半頃からあつたのださうですが、列國では、殆ど兒戲のやうに取り扱ツて、餘り之に深い注意を與へては居りませんで御座いました。處が、唯だ佛蘭西だけ、熱心に之が研究を加へて居ツたので、今日ではとう〳〵、實用に供せられる武器となツたので御座います。佛蘭西で、この潛航水雷艇の建造に成効しましてから、その後に、亞米利加のホルランドといふ會社で、更に進歩した潛水々雷艇を造りました。丁度その時が、亞米利加の西班牙戰爭後で、海軍擴張と云ふ機運に向かツて居りましたので、亞米利加海軍では、早速このホルランド會社試造の潛水艇を買ひ上げ、その後尙ほ續々、同型の水雷艇を、同會社に建造いたさせて居ります。

英國は、尙だその頃まで、果してこの潛水々雷艇なるものが、軍用に適するものであるか、否やと云ふについて、多少の疑を抱き、唯だ頻にこれが進歩、發達には注意を怠らんで居りました。が、何うも實用に供されさうだと云ふ見當が着きました處から、三年ばかり前に至ツて、この亞米利加のホルランド式水雷艇の建造を初めました。現に唯今では、その八艘ばかり、既に出來上りまして、專ら之が扱ひ方の練習をいたして居ります。まだ今後に建造する分が、十一艘ばかりもあると云ふことで御座いまして、本年中には、その一艘は、早く海軍の役務に就き、前の八艘と合はせて都合、九艘に成る勘定で御座います。佛蘭西は、本元だけあつて、本年中には、三十六艘の潛水艇が持てる都合に成ツて居ります。

漠然、潛水艇とばかり申しましては、ちよいとお分かりに成りますまいが、精密には、潛水艇と、潛航艇の區別があるので御座います。即ち潛航艇といふのは、專ら水面下にのみ運動するのを目的としたもの、潛水

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307

艇と云ふのは又、水面上に航海も出來れば、必要に臨んで、水面下に潜ることの出來るもの、潜航艇は、一定の地點、または母艦から發せられ、敵艦を目指して攻撃に向ひ、それで直ぐ還ッて來るもので、潜水艇は敵艦を見出だすまで、水面上を航走し、目的物を見着ければ、その目に掛からない中に、水面下に潜り、その任務を行ッて、敵艦から遠かれば、また再び、水面上を航走して逃げ還るもので御座います。詰まり潜水艇は、潜航艇の一層進歩したもので御座います。潜水艇の、水面上を航行する間は、普通、蒸滊力でその運轉を行ひ、同時に發電機を運轉して、その電氣を艇内に蓄積し置き、水面下を航行する間は、その電氣を原動力として運轉いたすので御座います。ですから、潜水艇の尚だ工夫されない間、潜航艇のみでは、單に防禦力だけのあるものとして、餘り有効な武器とはされてゐなかつたのですが、この潜水艇と云ふものが出來まして、初めて海上遠く、敵の根據地を目指して、攻撃に向かふことの出來るものと成りました。佛蘭西では、有事の日、英國の根據地を攻撃するを目的として、その各鎭守府に、幾艘か宛の潜水艇を備へることを、計畫いたして居るとか申します。

潜航艇なり、乃至は潜水艇が、水中に潜ッて居る間、その船の運動は、電氣力で之を行ふといたしまして、扨て之に乘込んで居る軍人は、如何にして密閉した艇内で、その呼吸を續けて居りますか、これは自然に起る疑問で御座います。之には即ち、壓搾空氣と申すものがあッて、空氣を小な塲所の間へ、大層に壓し詰めて蓄へて置きます。この空氣をば、チビ〳〵出して、艇員は呼吸いたして居る譯で御座います。

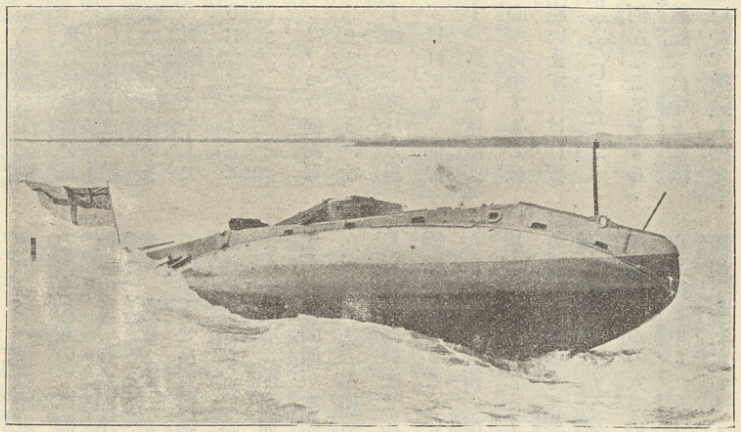
この通り、壓搾空氣を蓄へて置かなければ成らず、それに電動力の貯蓄も入りますし、船の中は從つて、大層狹う御座います。で、普通には七八人、高々十人ぐらゐを一艘の定員としてあります。まだ乘組定員が、この通り少いから宜しう御座いますものゝ、多ければ大變、高が蓄へて置いた空氣で、その貴い生命を繋いで居るのですから、乘組員が多いに從ッて、潜ッて居

られる時間が、だん〳〵と短く成ッて參ります。露西亞が、試驗の爲めに造りました潜水艇は五六日の間も、水のなかに潜ッて居ることが出來ると申しますが、如何で御座いますか。

序に申して置きますが、潜水艇といふものは、大抵葉卷煙草のやうな形をして居りまして、スッカリ厚い鋼鐵で包まれて居ります。御承知の如く、水には大層な壓力があるもので御座いますから、餘程厚い材料で造ッて置きませんと、船はその壓力の爲めに、壓し潰されて了ふので御座います。

また、この潜水々雷艇の、敵を攻撃する方法は、水面上に居り

英國にて初めて造りたる潜水艇



きする間に、能く敵の方角を見定めて置いて、その方角の方へ、潜ッたなりで進んで參ります。水面上に居る間でも、潜水艇は、餘り澤山その姿を、水の上に現しては居りませんから、遠くからは、容易に敵の目に掛かる氣遣ひは御座いませんが、また、その潜ッて居る間も、水面へ渦卷一ッ現しませんから、敵からは少しも氣着かれることは無いので御座います。其處で、略ぼ敵の間近まで進み寄りました處で、その進んで參ッた方向が、果たして誤らなんだか何うかと云ふことを、見定める爲め、一度一寸水面に浮かび出でます。この時敵艦から、認めれば認められるので御座いますが、その浮いて

居る間は、僅か一分もない位ですから、到底これを砲撃するなどと云ふことは出來ません。更らに見當を見定めて、今一度潜水艇の潜ッて參りました以上は、敵艦では何うしても、これを防ぐ道が無いので御座います。頻に、その潜水艇を防ぐ方法を、列國では今工夫して居りますが、まだ、それの發明されたと云ふことは、聞き及びません。

ですから、一度潜水々雷艇に狙はれては、モウ何んな大な軍艦でも駄目で御座います。たゞ一ッ有り難いと申しますのは、潜水艇は、右申します如く、度々方角を定めて、進んで參るので御座いますけれども、何分水の中では、前方を見ることが出來ず、眞乎の見當ばかりで、水雷を發するのですから、必ず命中すると云ふことの、請け合はれないことで御座います。けれども、一度發射して、よしや當たらなかッたにした處で、その潜水艇の潜ッて居る間は、また何んなことをするか、計られないで御座いますから、敵艦では中々油斷することが出來ず、何方に逃げて宜いか、進退も殆ど分からない程の始末で御座います。實に無氣味な武器の出來たものでは御座いませんか。

世界中で、この潜水艇を持ッて居りますのは、英國、米國、佛國、それから露國。日本では尚だ一艘も持ッて居りません。露國のも、まだ眞の試驗用ばかりで、東洋には、尚だ持ッて來て居らない模樣で御座います。よしや日本と露西亞との戰に、佛蘭西が加はりました處で、佛蘭西が本國から、この潜水艇を母艦に積み込んで、わざ〳〵加勢に來ると云ふことは、ちよいと容易では御座いませんから、多分この戰には、潜水艇の實効を檢めすことが出來ないで御座いませう。

しかし、佛蘭西の海軍演習などでは、毎々効を奏して居りますし、だん〳〵船の形を大くして、遠航に堪へるやうに進歩して參ッて居りますから、ある專門家の如きは、おひ〳〵砲艦ぐらゐの大さ、尚ほ進んでは巡洋艦ぐらゐの大さの潜水艇が、出來るやうに成るであらう抔と申して居ります。さう成りますと、戰爭は水面の下で行はれることに成りまして、海軍戰術の一大革命で御座います。日本でも、何でも近年に、三四艘の潜水艇を造るやうな計畫であるとか申します。

戰鬪と砲兵

步兵少尉　太田健朝

日本の砲兵には、要塞砲兵と野戰砲兵との二つの區別がある。要塞砲兵の事は後日述べるとして、野戰砲兵のお話を致しませう。これには砲種が二種あつて、即ち野砲と山砲とであります。野砲の方は六頭の馬にて曳く大砲で、日本では左の地に置かれてあります。

近衞砲兵聯隊（東京）　野戰砲兵第七聯隊（旭川）
野戰砲兵第一聯隊（東京）　同　第十三聯隊（東京）
同　第二聯隊（仙臺）　同　第十四聯隊（東京）
同　第三聯隊（名古屋）　同　第十六聯隊（國府臺）
同　第四聯隊（大阪）　同　第十七聯隊（國府臺）
同　第六聯隊（熊本）　同　第十八聯隊（下志津）

又山砲の方は一つの砲を四個に分けて、馬の脊に積むか、或は馬一頭にて曳く小さい大砲で、山地に用ゆるために設けられたものである。これは左の地に置かれてあります。

野戰砲兵第五聯隊（廣島）　同　第十一聯隊（善通寺）
同　第八聯隊（弘前）　同　第十二聯隊（小倉）
同　第九聯隊（金澤）　同　第十五聯隊（東京）
同　第十聯隊（姫路）

しかし、野砲でも山砲でも彈丸は皆同じことである。而して其彈丸は二樣に用ゆることができます。その一つは彈丸の下の方に奇妙なる仕掛があつて、適當なる敵のすこし前に當つて、空中で破裂するのである。一寸第一圖の如し。

さて此彈丸は、幾個位に割れるものかと云ふと、其計算の前に、我國野戰砲兵の編成からお話しなければ成らない。即ち其編成は目下、一ヶ聯隊は二ヶ大隊より成り、一ヶ大隊は三ヶ中隊より成り、一ヶ中隊は三ヶ小隊より成り、一ヶ小隊は大砲二門づつを持つて居りますから、一聯隊の大砲の數は、都合三十六門ある筈で

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL　AWM2020.22.307

す。そこで一ケ中隊の六門が、一分間に急いで打つと、四十二三發位は大丈夫打てます。それから一發の彈丸は、二百三十四個に割れるのであります。今一分間に四十發として、計算しますと、

40×234＝9360　一分間の彈子の數

9360×6＝56160　一ヶ隊一分間の彈子の數

いざ戰爭と云へば、此れだけの彈丸が、頭の上から降つて來るのであるから堪まらない。

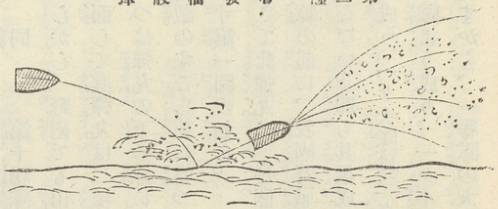
いま一つの打方は、同じ彈丸ではあるが、第二圖の樣に用ゐるのであります。即ち空中で破裂させないで、何かに衝突すると、其力によつて破裂する樣になつてをる。これは保壘とか何とか、兎に角障害物を破碎するために用ゐられるのであります。」

以上示せし樣に、大砲の火力は頗る盛んで、その効力も亦著しいものであるから、戰場に臨んで一發の砲聲を聞くと、味方全體の元氣をつける事此上もないのである。それが爲め困難なる戰鬪も、容易に全勝を博する樣な例が澤山あるので、諺に砲兵は、戰鬪の骨幹と申されてをります。尙ほ何の兵種にでも持久力はあるけれども、砲兵に至つては、この力が特に非常なものであります。

第一圖　曳火榴霰彈



第二圖　着發榴霰彈



しかし、一利あれば一害あるのは數の免かれざる所で、砲兵には自衞の力と云ふものがない、殊に運動中は尙更であります。近來砲兵の一部分に限つて、騎銃拳銃等を携帶させるとかの話がありますが、それでも充分なことには行きませんから、常に他の兵種から協力掩護される必用があります。其處で、まさかの時に砲兵は何うするかと云ふことは、

下に一例を示して置きますから、御承知下さい。

砲兵は又地形の爲めに、運動を制限せられます。殊に野砲に至つて、その制限が甚だしい。又暗夜濃霧のときは、殆ど効力を現はす力を滅じて了ひます。

今砲兵が、如何に全軍の爲めに元氣を增さしめ、大勝利を得たか、その實例を記して置きます。

明治廿七八年の日清戰爭のとき、第一軍の太平山の戰であつた。敵の砲兵陣地は、非常に有利の處で、又敵砲は、我が砲よりも優つて居ました。我が陣地は、不利の處であるし、且つ砲が劣つてゐて、距離が遠いものであるから、いくら一生懸命に打つても、敵の砲兵陣地には達しない、あり〳〵と前方に落ちるのが見えるにひきかへ、敵彈は盛んに我が頭上で破裂する。少年諸君、どうでせう、其時の砲兵であつたら——しかし、そこが日本魂です。此苦しい彈雨の中にもかまはず、砲兵は、我が歩兵の前進するのに元氣をつけましたから、とう〳〵歩兵は、敵の陣地を乘取りました。そこで此度は、我が砲兵が前進して、以前の敵の砲兵陣地に移り、今や潮の如く引き退ける敵の歩兵騎兵、殊に今まで、我が軍を苦しめた砲兵をさん〴〵打ちまして、大勝利を得て、我が軍萬歲を唱へたと申すことです。實に此大勝利は、歩兵の力もあるが、又砲兵の力も、非常なものであります。

これは外國の話でありますが、砲兵は火力が盛んであるから、之れを利用して、我が退却するのを助け、敵の前進を喰ひ止める樣なこともあります。

西曆千八百六十六年七月、墺太利の一軍團が、リバーといふ處で防戰を行ひましたが、戰況不利で、東南の方向に退却を始めました。すると、獨逸の一軍團が、隙かさず烈しく追擊したから、墺太利の野戰砲兵四ケ中隊は、敵を喰ひ止める任務を受けました。けれども何うして、僅か四ケ中隊位の砲兵で、獨逸の大軍に敵することができませうか。敵の大軍は、此砲兵を目標として、盛んに進んで參りました。砲兵は一生懸命に打ッて〳〵打ち据にて、僅に時間を得て、味方の退却を助けましたが、敵も其時には、既に間近く前進して

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307

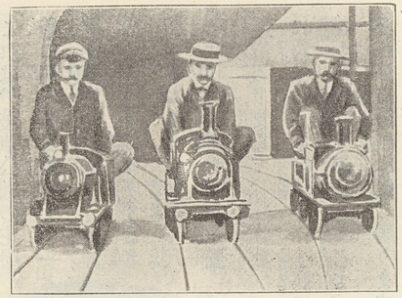
來ました。天地も撼がん許りの大聲擧げて突貫して來ました。しかし此砲兵は、始終沈着に構へて、とう〳〵敵が十五六間前まで達した時に、最後の射撃をして大砲を壞し、腰間の短劍や、砲の道具を振り翳して、眞一文字に敵中に飛びこみました。あゝ此砲兵は、生きて立派な勳章を貰うことは出來ませんでしたが、此勇敢なる名譽なる戰死は、幾千代までも歷史の上に輝いて、後世軍人の龜鑑となつて居るのであります。

鷄車

馬車、電車、瀛車などゝ申しますから、是はさしづめ鷄車と申して宜いのでせう。車に乘ツてをる小供は、その名をジョージ ロージャースと申します。先年駝鳥の、達者に歩くものだと云ふことを聞きましてから、それが欲しくツて、それに車が曳かせて見たくツて溜りません。處が、駝鳥はちよいと得られません處から、その代はりに鷄の雛を、この目的の爲めに仕立てました。鷄は、ロック ロースターと云ふ種類で御座いまして、脊の高サ十六吋(一尺三寸餘)、重量十二斤(一貫四百四十匁)、壯健で、足もなか〳〵早う御座います。これを慣らしますには、大分骨が折れたさうですが、唯今では、よく言葉を聞き分けまして、止れと云へば止り、歩けと云へば歩き出し、極素直ださうで御座います。

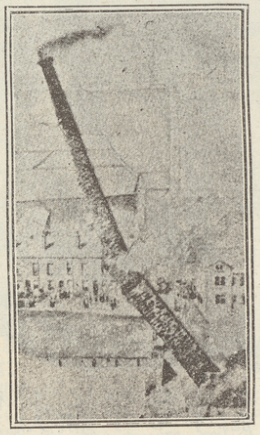


手遊汽車



イギリスの子供の中には、小な手遊汽車を弄ぶことが、英吉利の大層に流行ります。富豪の家などは、自分の邸内に、それを走らせる鐵道が、何百碼と云ふ長サにまで續いて居るのがあり、また、橋があツたり、隧道があツたり、複線に成ツて居たり、信號組織の備はツて居るのなどがありまして、子供は巧にそれを運轉させて、遊んで居ります。此處に寫眞に成ツて居りますのは、三條の並行んで居る鐵道の上で、その手遊汽車が、競走して居る處で御座います。

圓突取壞はしの便方



長い煉瓦の煙突、これが工場の都合か何かで、取壞はさなければならないやうに成るのは、隨分ある慣で御座います。併しこれを頭の先から、煉瓦一枚づつ取り壞はして行かうと云ふのは、隨分大變なことで、大層な足代の必要もあらうし、また少からぬ費用が掛からます。其處で西洋などで、一般に行ひます方法と云ふのは、先づこれを根元の方から壞はし掛けるので御座います。根元の方から壞はして、其壞はした處を、暫く木材で支へて置きます。そして愈〳〵引き倒すと云ふ日に、この木材に火を掛けます。さうすると、その木材の燒け落ちると同時に、煙突は、その木材の支ツてあツた方角へ、獨で倒れて參ります、その時に長い煙突が、丁度眞中處から二ツ

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307

に折れるのが普通で御座います。これが一番簡便で、危險の少い方法と致してあります。

姫鹿

これは、淺草公園の花屋敷に飼てある動物で、一名を豆鹿とも云ひ、南洋のボルチヲ島に産する者で御座います。身長一尺三寸、背の高サは七寸五分程ありまして、牝牡共に角なく、その代りに上腭に長サ四分許りの牙を生じて、それが口の外に出て居ります。其樣はちよつと麝香猫のやうにも見えます。性質は至つて温和しい方ですが、その驅け廻ること〳〵云つたら、非常に速いもので、毎に陸又は淺い水畔の所を遊び歩いて居ります。この動物の特質として、遊び歩くときには、決して一疋や二疋では行かず、いくつも〳〵群を爲して、しかも列を崩さず、正しく並んで行きます。そこで土人は、ブランドと稱へて居るさうですが、これは軍隊の意味で御座います。毛色は普通の鹿の冬毛と同じで、只異なる點は、咽喉の所と腹とに白い條の斑紋があることで、尾の色もやはり白いので御座います。併し英吉利に至つては、殊に其れが甚だしい。『英吉利人は運命を知る國民なり』とは、好く人のいふことでありますが、誠に其通りで、同國は丁度我が日本帝國の如く、四方海を以て圍まれて居る爲めに、海軍は甚だ膨脹上、最も大切なる道具といふよりも、寧ろ其生命といつても宜いので、其國家との關係は、之を他國に比して一層密接であります。隨つて其歷史は古く、また其名譽は高く、隨つて又其觀念も強く、苟くも海といふ觀念は、英吉利人を各方面に支配し、各方面に刺激するものでありまして、夫の『海上の生活』、『海上の英雄』、『海上の墳墓』などいふ言語は、英吉利人に取りまして、一種の魔力を有つて居る次第で御座います。要するに斯くの如き海國民があればこそ、斯くの如き大海軍が出來るので御座います。それですから海員の教育といふものはなか〳〵嚴重であつて、何れも極小さな時分から海上に出て、船内で有用の學藝を習ふことになつて居ます。現に唯今の英國皇帝エドワード七世陛下の第一皇子アルベルトで御座いますが、併し英吉利に至つては、殊に其れが甚だしい。『英吉利人は運命を知る國民なり』とは、好く人のいふことでありますが、誠に其通りで、同國は丁度我が日本帝國の如く、四方海を以て圍まれて居る爲めに、海軍は甚だ膨脹上、最も大切なる道具といふよりも、寧ろ其生命といつても宜いので、其國家との關係は、之を他國に比して一層密接であります。隨つて其歷史は古く、また其名譽は高く、隨つて又其觀念も強く、苟くも海といふ觀念は、英吉利人を各方面に支配し、各方面に刺激するものでありまして、夫の『海上の生活』、『海上の英雄』、『海上の墳墓』などいふ言語は、英吉利人に取りまして、一種の魔力を有つて居る次第で御座います。要するに斯くの如き海國民があればこそ、斯くの如き大海軍が出來るので御座います。それですから海員の教育といふものはなか〳〵嚴重であつて、何れも極小さな時分から海上に出て、船内で有用の學藝を習ふことになつて居ます。現に唯今の英國皇帝エドワード七世陛下の第一皇子アルベルトで御座います。



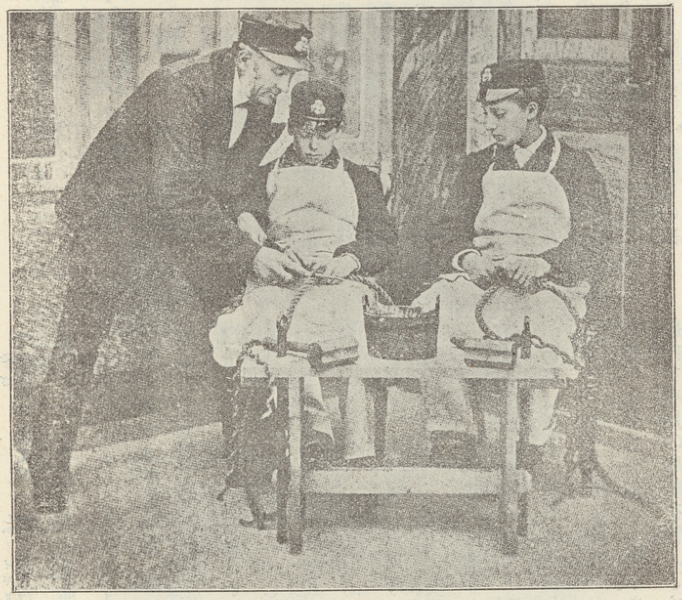
英國幼年皇族と海軍

川面弘

世界強國中の帝國と云へば、皆さん御存知の英吉利で御座います。同國は、一名を海王とも言はれる程ありまして、世界無比の大海軍を有つて居ります。英國に次ぐ海軍國は、唯今の處、佛蘭西としてありますが、單に軍艦なり水雷艇なりの數から言つても、兩國の間には非常の相違が御座います。が併し、所謂大海軍の大海軍たる所以は、強ち軍艦や水雷艇の數ばかりをいふのでは無く、寧ろ是れ以外の點を指すので、實際同國の海軍には、他國の海軍が到底相爭ふことの出來ない歷史、名譽を有つて居るのみならず、其實質に於ても、甚だ恐る可きものがあります。

凡そ何れの國でも、苟くも海軍を有つて居るものは、之を以て立國の一大道具として居ることは、無論の話

ト、及び第二皇子ジョージ（即ち今の皇太子殿下、）の兩親王の如きも、海軍軍人とならんが爲めに、尊き皇族の身でありながらアルベルト親王は七歳、ジョージ親王は六歳のときに、早く既に父母君の膝下を離れ玉ひ、ダートマスといふ港の練習艦ブリタニア號に乘組み、艦内に於て二箇年間、海軍教育を受けられ、超えて千八百七十九年九月には兄君十五歳、弟君十四歳の弱年を以て、少尉候補生の資格で、軍艦バシャント號に召して地中海、西印度、ベルミユタ島に遠洋航海をしまして、翌千八百八十年五月に歸航せられ、次いで翌八十一年より二年にかけては、再び候補生として世界一週の大航海をせられ、その途次我が日本へも來航せられました。此時アルベルト親王は十七歳、ジョージ親王は十六歳でありましたが、航海中兩親王の取扱ひは、全然一般候補生と同樣で、晝といはず夜といはず、雨といはず風といはず、當番の毎に或は船橋に立つて當直をしたり、或はマストの上で帆を操つたり、或はボートの任務を盡されたり、凡そ候補生の執る可き職務といふ職務は



嚴重に之を課されたのみならず、食事の如きも士官次室で、他の士官と一切變らぬものを用ひられたといふことで御座います。此處に載せた圖は、即ち兩親王がダートマスの練習艦内で、老武官から繩を綯ふ稽古をして居られる所であります。

我が海軍兵學校

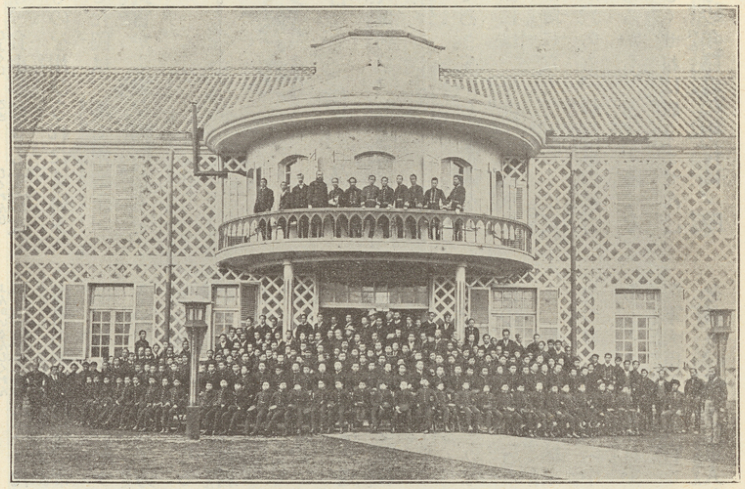
海軍大佐　谷　信久

日露戰爭も第一番に、海軍が大勝利で、帝國萬歳海軍萬歳です。さて諸君は、地圖を見ても御承知でせうが、我が帝國は四方皆海を環らしてゐますから、帝國を守り、又帝國の勢力を海外に振ふには、是非とも海軍でなければ成らないので、帝國が隆になり、若しくは衰へる（そんな事はないのですが、）のも、皆海軍の勢力に依るのです。さう云ふ譯であるから、帝國が隆になればなるほど、海軍は益々大きくせねば成りません。」この雜誌の讀者たる花のやうな少年諸君の中には、隨分海軍士官になりたいと申す方もあらうし、又今日大海戰の大勝利に、帝國の威光を輝かした海軍の將校方は、何んな教育をうけて斯く立身せられたものであらうか、と思はるゝ方もありませうから、今これから、その海軍士官になる生徒を教育する、海軍兵學校のお話をして、今後諸君が志を立てられる御參考にいたしませう。

然しこのお話をする前に、一寸諸君に見せるものがあります。それは此處に揭げた寫眞です。この寫眞は、明治五六年頃の海軍兵學校（當時は海軍兵學寮と申しました。）の校舍と、その職員と生徒とで、その中に並んで居る花のやうな少年生徒も、今日では皆五十歳前後の人となつて居るのですが、いづれも少年時代からよく勉强された結果大に出世されて、袖に多くの金線をつけて、大抵（中には不幸にして、死去された方もありますが、）今日では大佐以上、少將中將となられ、海軍大臣又は次官となつて、日本帝國海軍の高等の政を執り、多くの軍人を監督して、帝國海軍の進歩を計

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL　AWM2020.22.307

つて居られる方もあれば、鎮守府司令長官又は要港部司令官となつて、日本の海岸と海面とを守つて居られる方もあり、幾萬噸の艦隊を率ゐ、軍艦を率ゐて、帝國の武威を海外に輝かして居られる方もあり、海軍の軍事教育を引受けて、幾十萬の水兵たちを教育し、又幾十萬の海軍士官となる生徒を教育して居らるゝ方もあり、何れも重い責任を以て、我が帝國のために盡されて居る方々ばかりです。私もこの寫眞の中に居ります。そ



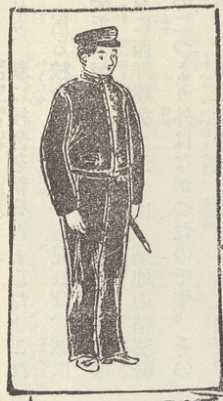
れで今日我が海軍が、かばかり盛になつたのは、重にこの兵學校の生徒であつた現在の海軍將校の方方が、大に勉強された結果であると申しても可いでせう。

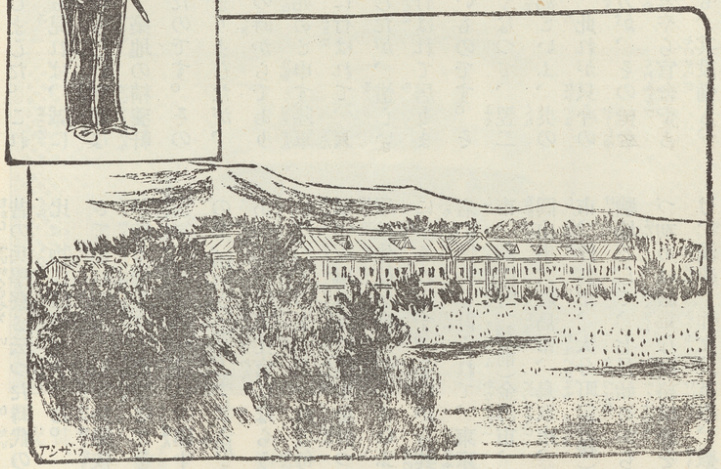
お話が大分側へ外れましたが、さて海軍兵學校と申すのは、明治二年に海軍操練所と云ふものを設けられたのに初まるので、その當時は、生徒を海軍修行生と云つて、大藩から五人、小藩から三人と云ふ割で、十八歳から二十歳の青年を、この學校に入れて教育したのですが、同三年に名を海軍兵學寮と改め、生徒を幼年生徒と壯年生徒とに別け、(後にこれを豫備科生徒、本科生徒と申しました。)同四年には生徒の志願者を日本全國から採ることになり、新に校舎を新築しました。これが此寫眞に寫つて居る校舎で、今日から見れば、誠に詰らない西洋建築ですが、その當時は珍らしい立派なもので、廣い東京に西洋建築と云へば、築地の精養軒と この學校とのニツより外はなかつたのです。その後九年に學校の名が、海軍兵學校と改まりましたが、海軍兵學校と云ふ名の出來たのは、この時からであります。その頃は毎年一月九日に、海軍始めと申す陸軍の觀兵式のやうな儀式が、學校の構内に行はれて、天皇陛下も行幸になり、なか〳〵賑がでしたが、惜しい事には十一年限りで、其後は今日まで行はれて居りません、何うかまた行はるゝ樣に願ひたいものです。それから十九年に豫科生徒と云ふのが廢くなつて、翌二十年の八月には、學校が廣島縣の江田島といふ、呉の軍港の前に當る島の内に移轉しました。此れが只今の海軍兵學校で、此處にかいてある繪の方が、その校舎であります。構内の廣さは十萬坪、校舎やら官舎やらの建物が、五十棟程もあつて、其建築も、其設備も、昔の兵學寮と云つた時代のものから見ると、なか〳〵比べ物にはなりません。

さて是れから、海軍兵學校の入校の手續から、生徒が學校で修業する有樣などを摘んでお話し致しませう。海軍兵學校の生徒は、滿十六歳から滿二十歳以下のもので、中學校を卒業して居るか、又は卒業だけの學力があつて、海軍士官にならうと志願する者から募ることになつてゐます。それで毎年三月頃、海軍教育本部(海軍の軍事教育の進歩を計つて居る役所。)から、海軍兵學校生徒を幾人募るといふ達しを、官報に掲げて一般に示されます。それから其入校試驗場は、全國の志願者の便利を計られて、東京市、京都市、仙臺市、青森市、鶴岡町(羽前)金澤市、新潟市、長野市、名古屋市、岡山市、廣島市、鳥取市、山口町(周防)松江市、高知市、佐賀市、大分町(豊後)熊本市、鹿兒島市などを試驗地として、七月始めから入校試驗を行ひますが、先づ初めは嚴重な體格檢査を行つて、之に合格した者だけ、漢學、作文、英學、數學、地理、歴史、物理、化

から採ることになり、新に校舎を新築しました。これが此寫眞に寫つて居る校舎で、今日から見れば、誠に詰らない西洋建築ですが、その當時は珍らしい立派なもので、廣い東京に西洋建築と云へば、築地の精養軒と この學校とのニツより外はなかつたのです。その後九年に學校の名が、海軍兵學校と改まりましたが、海軍兵學校と云ふ名の出來たのは、この時からであります。その頃は毎年一月九日に、海軍始めと申す陸軍の觀兵式のやうな儀式が、學校の構内に行はれて、天皇陛下も行幸になり、なか〳〵賑がでしたが、惜しい事には十一年限りで、其後は今日まで行はれて居りません、何うかまた行はるゝ樣に願ひたいものです。それから十九年に豫科生徒と云ふのが廢くなつて、翌二十年の八月には、學校が廣島縣の江田島といふ、呉の軍港の前に當る島の内に移轉しました。此れが只今の海軍兵學校で、此處にかいてある繪の方が、その校舎であります。構内の廣さは十萬坪、校舎やら官舎やらの建物が、五十棟程もあつて、其建築も、其設備も、

學、畫學に就いて何れも中學卒業程度の學力に相當する學術試驗をします。然し官公立の中學校か、海軍省で宜しいと認めた私立中學校でなければ成りませんが、是等の中學校を卒業して居る者には別に特別試驗と申して、漢文、作文、英學、數學だけの試驗で濟むこともあります。それですから志願者は、何うしても身體が强健で、中學校を卒業して居る者でなければ成りません。試驗が濟むと、其成績に依つて生徒に採用されるので、九月の初め頃に、生徒に採用される人名を、官報に掲げて一般に知らせます。それから首尾能く試驗に合格して、愈々生徒に採用される事に成りますと、十二月の中頃に、入校といふ事になりますが、入校の日から、名譽ある海軍の軍人となるので、其日からは官費で、學費、制服、食料、書籍、文具など一切賄つて、丈で幸福な學校生活をするやうになります。繪の上部に現はしたのは海軍兵學校生徒で、結局かう云ふ風になるのです。それで海軍の生徒は、我が海軍では何れ位の地位にあるかと申しますと、其れは勿論下士兵卒の上で、準士官の次であります。何しろ行く〳〵は、



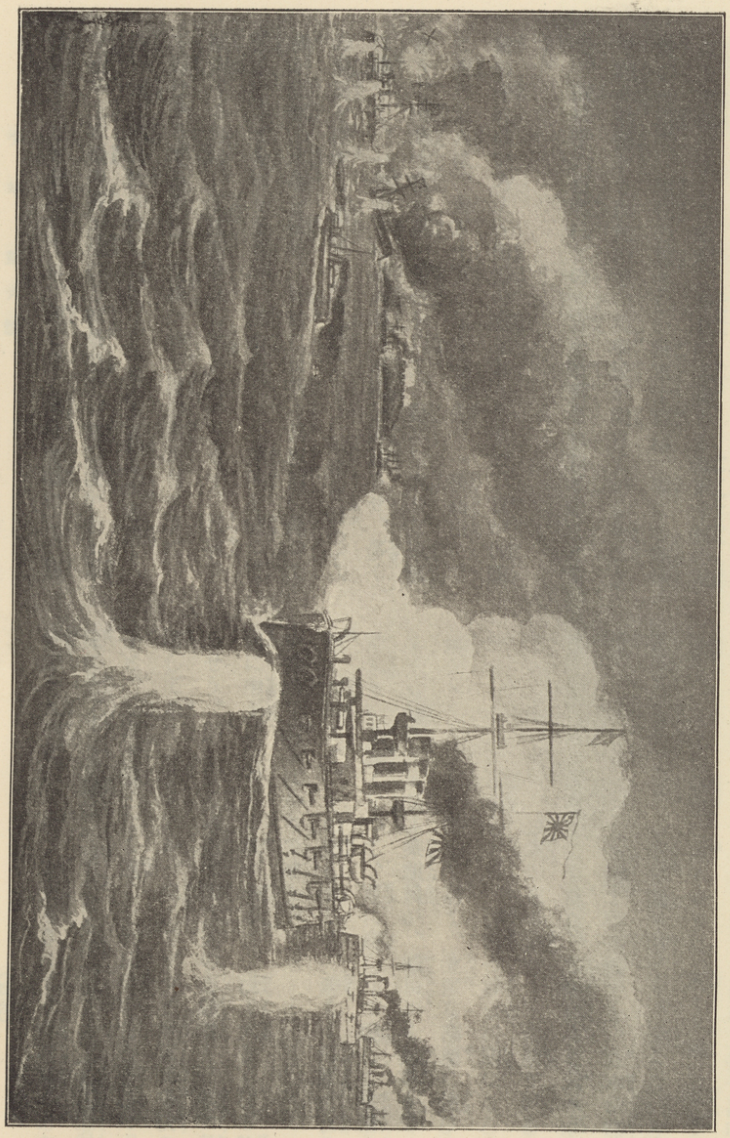


海軍の士官になる身分のものであるから、其待遇は初めからなか〳〵宜いのです。

それから生徒は三年の間、この學校の內で、第一に兵卒の上に立つて、兵卒を卒ゐる品格と性行とを高めるやうにと、精神教育（結局修身のことです。）を施され、次に、海軍士官に必要な知識を備へるため、砲術、水雷術、航海術、運用術、機關術などの兵學を學び、又海軍士官として必要な學問を修める基となる普通學を習ひ、（其普通學の中では、數學と外國語學とが重く見られてゐます。これは海軍士官の職務の上からも、また兵學を研究する上からも、至極大切なものだからです。）又別科と云つて、圖畫、漢文、海軍衞生學、海軍刑法、海軍歷史、體操、銃劍術、水泳、柔道、端艇競漕、大砲發射、小銃射撃などをもする事になつて居ます。斯樣に學科が種々ある上に、やがて此校を卒業すると、海軍士官となつて多くの兵卒の上に立ち、兵卒を率ゐ、兵卒を訓練する事になるのですから、生徒は其責任の重いため、中々大勉强をしなければ成りません。然し此學校では、よい事には一人の教官が、一年級から二年級三年級を經て、卒業するまでも一つの學級（海軍では之を「クラス」と申して居ります。）に付き切つて、生徒の一身の上にも、學術の上にも、模範となり指導者ともなつて、よく生徒の面倒を見て教育されますから、生徒と教官との間柄も親密になり、教官の教育がよく感化するので、生徒の學術の進歩には、大層利益があるのです。これは海軍の學校教育の一番よい所で、他に類のない完全な教育法でありませう。兵學校の生徒は、入校してからは自分の都合で、退校するやうな事は出來ません。不品行であつたり、學術が劣等であつたり、病氣になつて迚も士官たる身體に適しなかつたり、士官となる器量がなかつたりすると退校を命ぜられます。

生徒が入校してから、滿三年目に卒業試驗があつて、盛大なる卒業式があり、その時は天皇陛下の御名代として、皇族殿下がお出でになり、優等の卒業生には賞品を賜はります。かく兵學校を卒業しますと、其日少

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307



圖の戰海大順旅

尉候補生（陸軍で云へば、見習士官です。）となつて、袖に細い一條の金線をつけて、初めて海軍士官の中に入りまして、すぐに實地の練習かた〳〵、海上の生活に慣れ、又軍艦の實務を見習うために、練習艦と云ふ軍艦に乘組んで、日本の沿岸から支那海、南洋諸島邊、大洋洲邊の遠洋まで、練習の航海をすることになります。然し此時にも一年級以來おなじみの教官は、その練習艦の職員になり、共に軍艦に乘つて、八箇月餘り親しく實地の教育を致されます。この遠洋航海は、めで度く兵學校を卒業して、海軍士官の中に入つた者が、實地の研究をする外に、初めて外國に航海して、外國の風俗や文明などを見るのであるから、苦しみもありますが、樂しみも多いと申して宜いでせう。幾千噸の大艦が靜に波を破つて行くと、一刻一刻に遙か向ふの空に雲かと見ゐる小さいものが、だん〳〵山と見え、陸地と見え、やがて其地に着いて、多くの外國船の居る間を縫つて、軍艦旗を飜へして、悠々と錨を下すなどは、どんなによい心地がするでせう。然し長い航海の間には、また暴風に逢つて山のやうな波のために、船が木の葉の如く覆りさうになる事もあります。斯ういふ時も之に負けずに平日の通り、候補生として其職務をするのであるから、なか〳〵辛ひ事もあるのですが、此んなことに逢ふ度に、だん〳〵軍艦内の職務に慣れ、海上の有樣にも慣れて來て、終には波にも風にも恐れなくなり、天晴立派な士官として恥ぢない樣になるのです。此航海の終りに、航海中に習つたことに就いて試驗があつて、その成績と、前の兵學校卒業試驗の成績とに依つて、其人の伎倆を定められるのですから、此航海も中〻大事なものです。さて遠洋航海が終ると、又今度は外の軍艦に乘組みます。今までは同級生と一所に居つたのですが、是れからは皆別々になつて、多年世話になつた教官にも離れ、又其艦で四箇月ほど、專ら實務の見習ひをしまして、茲に初めて少尉候補生は、少尉となる資格を得るのです。つまり兵學校を卒業してから、少尉になるまで、凡そ一箇年ほど掛ります。その後は其人物の優劣次第で、だん〳〵

拔擢されて、中尉大尉少佐と進級して行きます。

以上申述べましたのが、今日の名譽ある海軍士官の出世の一斑で、現在の勇ましい海軍士官は、皆この順序で隨分勉强をされたので、兵學校が開けてから今日まで、既に千六百名ほどの士官を敎育されたとのことです。

世の中にはいろ〳〵出世の道もありますが、我が海國に生れた人は、海軍士官となるのが先づ一番面白いでせう。海軍士官が重い責任を以て、堅牢な大きな軍艦に乘つて、一令の下に幾萬噸の軍艦を運動させ、多くの兵員を指揮し、戰時には軍艦旗の下に敵艦を破つて、我が帝國の名譽を揚げ、平時には折〳〵暴風雨に逢つて苦しいこともありますが、其山のやうな荒浪を破つて航海するのは、丁度寄せ來る敵を物ともせず、打破つて進むやうであるし、又風が靜で波の滑かなときは、清い海の風に吹かれて、ひろ〴〵として居る海を渡り、甲板の上に金の波が流れる朝景色や、銀の波がある月夜のさまなどを眺めては、何となく浮世を離れて、仙人にでも成つたやうであるし、それに又幾千萬哩の外國も、まるで隣家に往くやうに、度〳〵外國に航海して、世界の文明を見ては新智識を得たり、珍らしいものを見たり聞いたり、又外國では何國でも、日本帝國の軍人として厚い待遇をして呉れ、其服裝はと云へば、帽子も上衣も袴も、威嚴のある金モールの飾りがあるものに、美しい肩章を付け、俸給は澤山に賜はるし、お城のやうな軍艦に乘つて居て、立派な部屋に住ひ、おまけに幾百人と云ふ乘組員が、艦長から兵卒まで一つの大きい家族となつて、互に親しんで樂しく生活して往く愉快さと、その樂しさとは、恐らく海軍士官のみが知つて居るばかりでせう。

前に申上げたやうに我が海軍は、段〳〵大きくなる許りでせう、聞けば海軍兵學校生徒の志願者も、年〳〵多く增して來てゐますとか。以上でザッと海軍兵學校の樣子と、海軍士官となる道とを御紹介いたしました。

兎に角、今この雜誌の讀者たる花のやうな少年讀者は、身體を大切にし、且つ勉强もされて、此寫眞にある方

方のやうに随分出世をされて、我が帝國のために力を盡されんことを祈ります。

我日本國人は東洋の先導者として亞細亞の一天に文明の光を輝かし億兆の頑民を光明の中に攝取せんとて心身を勞するものなり之に敵對の決意を示すものあらば問答無用、唯進んで勝敗を決するの一事なるのみ

福澤先生論文

獸國漫遊記

白熊征伐

北澤樂天



熊の總督は武坊ちやんに酷い目に遇ひ、命からゝ〳〵自分の本城に歸りましたが、扨天から降つたか地から湧いたか、譯の解らぬ大和武雄とか云ふ異形な獸類に、豚の加勢をされては、この末迚も今までの樣に思ふ存分の惡戯が出來ないといふ所から、是非とも一戰して、彼の武雄を追拂ツて了はうと戰の評議をいたして居ります。武雄の方でも又、あの晩の事からだん〳〵豚共の話を聞けば聞く程、熊の我儘勝手で、そして亂暴なのが捨置けなくなりましたから、豚共に『おれが敵を取ツてやるぞ』と申聞けました。すると、大勢の豚は躍り上ツて喜び勇み、武雄のお手傳をしてせツせと戰の用意をしたり、又武坊ちやんが何うか戰に勝つて、大事の〳〵寶珠の玉を熊の手から取戻せます樣にと、守神の八大龍王に祈願をかけたりして居りました。やがて其内に戰の用意も調ひましたので、武坊はヂョンとたツた二人で、敵の根城を逆擊する事にしました。先づ豚共に申付けて、熊の根城の周圍、程善き處に、大きな陷穽を幾個も堀らせて、その上を草で判からぬ樣に隱して置かせ、ヂョンと二人で城の大手の門に立ち向ひ、豫て用意をして來た爆裂彈を叩き附けました。此時城内にては、いよ〳〵武雄めを追拂う戰の仕度が出來たので、先づ〳〵前祝に一杯やらかさうと、總督を始め皆々大陽氣に酒宴をやつて、呑めよ謠へと、ぐでん〳〵に醉拂ひ、此方の方では素人芝居を仕組んでドンチャン〳〵大騷をして居ります。その眞最中にヅドンと云ツたか、ドカンと云ツたか、覺えもない程大きな地響がして、耳が筋斗返りをして了ひました。『オイオイ、今なア何だらう』と云ふ間もなく、又もヅドンと響いたかと思ふと、今度は熊共の體がデングリ返ツて了ひました。熊共は譯も判らず、只アア、と呆氣に取られて居ますと、又ヅドン……漸く彼の武雄が、押かけて來たのだ云ふ事が判りましたので、皆々今までの醉は何處へやら、眞ッ青になつて戰慄して居りましたが、夫れでも斯うしては居られぬと、遽に防戰の用意をいたしました。武雄とヂョンは、城門を打壞して城内に入り込み、『出て來い〳〵、やアい』と呼びましたが、如何して〳〵飛んでもない、そんな危ないものを持つてる奴と戰が出來るものかと、何れも縮籠つて出て來る處ではありません。そこで餘儀なく熊の守神の大鷲に、どうぞこの國の危難を救ひ給へと、一心に祈りましたので、守神の大鷲は、武雄を摑み殺さうと神社の中から飛び出して來ました。武雄はそれとも知らず、何うしても熊が出て來ないから、今度は烟硝で燻しにして、誘き出して遣らうとして居ります。大鷲は只一摑みと勢ひ込んで來ましたが、忽ち烟硝の臭が鼻に入ツて目か廻る程

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307

で、仕方がないから輪に舞ひながら、躊躇して居ますと、そこへ豚の守神の龍玉が飛んで來まして、驚と大喧嘩をして、虚空遙に舞上ッて了ひました。その内に烟硝の煙が城内に滿ち〳〵て、熊共は何れも堪らなくなり、噎をしながら遁げ出して、みんな陷穽の中へ落ちて了ひました。そこで武雄は、熊總督を縛り上げて、豚に寶珠の玉を返へさせてやりました。熊總督は涕なからに『昔日本の國では、日本武尊が熊襲を征伐をしたと云ふ事ですが、熊はどうしても大和武雄には敵ひません』と只管降參を願ひましたとさ。めでたし〳〵。

刀の切味

梅泉

第一

太閤豊臣秀吉の時代に、小早川隆景といつて、強い大將がありましたが、この物語は、右の小早川隆景が、九州筑前の立花城に居た時の事です。

扨その立花城の城下に、劍術の町道場がありまして、澤山に門人がある中で、隆景の小姓の平岡久彌といふ者と、浪士の悴の大山登之助といふ者とは、年も同じ十八ですし、劍術の腕前も、今まではまことに似たか寄つたかで、何方を上とも極められませんでしたから、道場の席順は、先に入門を爲た久彌の方を、上席に爲てありましたが、登之助は近頃必死に修行を爲て、もう久彌を逐越すやうに、強くなつて居るのです。

其所で先生は二人の者を呼びまして『お前方へ申付ける事があるのだ、平岡の方は顔が古いから、假りに上席に爲て置いたけれど、少しでも腕の優つた方を上に爲なければ、互の勵みにならない、依つて今日は二人の力量を試して、本統の席順を極めるから、三本勝負で立合ひな』と命けました。

けれど久彌は返辭を爲ません、なアに、今別に勝負を爲ないでも、私の方が上に極つて居るのだもの、力量を試すのは餘計な事だと、さう思つて居るのです。登之助は忽ち『はい』と答へました、今までに口へ出した事はありませんけれど、私は久彌には負けないと積りだ、本勝負を爲て見たいものだと、かね〳〵思つて居たものですから、我知らず返辭の聲が出たのです、そしてもう直に稽古場へ出て、擊劍道具を着け掛けました。

久彌も今はもう仕樣がありません、相手が支度に掛つたのに、自分一人厭だとは言へませんから、しぶ〳〵稽古場へ出て、身支度を爲初めました。



外の多勢の門人達は、さア二人の噺の勝負だといふので、稽古場の周圍をぐるりと取卷き、試合の始まるのを待受けて居る

のです、その中には、久彌びいきの者もあり、登之助びいきの者もあつて、銘々がひそ〳〵話『もう今から分つて居る、どうしたつて平岡が勝さ』、『いや、まア見て居な、きツと大山が勝つから』などと言つて居ます。

先生も二人の勝負を見る爲めに、稽古場の一段高い所にある見分所へ出ました。

さア斯うなると、試合の本人は氣が張ると見えまして、すでに二人とも支度が濟んで、互に一禮を爲つゝ、ずツと立上りましたけれど、容易に竹刀を動かしません、久彌は大上段に、登之助は正眼に構へたまゝ、いつまでも睨み合つて居るのです。

登之助はその内に、敵の隙間を見付けたらしく、急に竹刀を横へ飛ばして、『お胴ッ』と一聲、久彌の右の脇腹へ、鋭く一本打込みました。

久彌は思はず『參つた』と叫んで、脆くも初太刀を取られました。

次の二度目の立合は、始めのやうな飽氣ないのではなく、今や雙方汗みづくになつて、火花を散らして戰ひつゝ居るのです。

見物の門人達は、何れも贔負の方へ目を注いで『しツかり〳〵』、『其所々々』などと聲を掛け、力を付けて遣つて居ます。

久彌は酷く戰ひに疲れた體で、後へたぢ〳〵となりました。

登之助は其所へ附込み、『お面――』の聲と諸共に、烈しく眉間へ打下して、また勝を取りました。

登之助びいきはほツと安心、久彌びいきはがツかりしました、それもその筈、勝負は三本極ですけれど、はや二本取つた登之助は、もう上席に定まつて、久彌は下席に定まつたからです。

併し本人の登之助は、まだ安心は爲て居ません、成らう事なら、殘りの一本をも自分が取つて、手際好く勝通したいと思ふゆゑです。

久彌の方もまた同樣で、もし三本とも取られては、餘り見苦しい負になるから、せめて今度の一本だけでも勝ちたいと、今は血眼になつて居ます。

だがそれも無効でした、登之助は又もや久彌の胴へ打込みました。

久彌贔負は大落膽、登之助贔負はどツと褒聲。

先生は今までは、たゞ無言で見て居ましたが、この時忽ち聲を放ちて『見事々々、大山此所へ。』

登之助は面を外して、先生の前へ出ました。

先生は座を乘出して『お前は三本ながら取つて、實に立派な勝を占めた、感心だ、天晴だ、ことに勝ちやうが餘り見事で、たゞ席順を上げるだけでは、何だか褒め足りないやうに思ふから』と傍の刀掛の刀を取つて『さア、これを御褒美に上げる。』

登之助は驚きまして『えーッ、その結構なお腰の物を私へ。』

先生『さうだ、これは駿河の國の住人義助といつて、上手な刀鍛冶が打つた業物で、長さは一尺八寸あつて、中々能く切れる刀だ、大切に所持を爲て、眞逆の時は、お前のその冴えた腕で、今平岡を負かしたやうに、立派に敵を切るが好い。』

登之助『有難うございます、有難うございます。』

先生は登之助の悦ぶ顏を、嬉しさうに見遣りながら、立つて奥へ入りました。

第二

登之助びいきの一人、增本といふ男が聲を掛けて『おい、大山、貴公は先生からお差料は頂くなんて、旨い事を爲たぢやアないか、どれ、私に見せろ。』

登之助はにこ〳〵しながら、刀を持つて行きました。

增本は夫をすらりと拔いて見て『あゝ、見事な刀だ、これは切れるぜ。』

登之助『先生も能く切れると仰しやつた、併しどんな風に切れるか、人の身體を試して見て、この刀の切味を知りたいもんだ。』

久彌は忌々しがつて、横間から憎まれ口『大根でも切るが好いや』と言ひました。

登之助はぐツと久彌を睨みましたが、今物を言つては、きツと喧嘩になりますから、何も言はないで了ひました。

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL　AWM2020.22.307

第三

登之助は思ひも寄らず、名人の鍛へた刀が手に入つたものですから、どんな風に切れるか、何所まで能く切れるか、その切味を知りたくつて成りません、けれど罪咎もない人を、みだりに試し切にする事は出來ませんから、どうか軍でも起つてくれゝば好い、すると早速何方かの軍勢の味方を爲て、思ふさま敵方の奴を切つて、一つにはこの刀の切味を知り、また一つには手柄を爲て遣るのだがと、その事のみを思つて居ました。

所が折好く軍が始まる事になりました、けれど容易く行く事が出來ません、と言ふのは、軍の場所は、外國の朝鮮です、太閤が朝鮮征伐を思ひ立つたのです。就いては登之助は、嬉しいやうな悲しいやうな氣が爲ます、あゝ、丁度誂へ向の軍だけれど、朝鮮では困る、海を隔てた遙に遠い國だから、自分の勝手には出掛けられず、太閤樣へ願つたとて、この邊鄙の浪人者の子に、從軍を許して下さる譯がない、兎ても無効だ、だ

增本『おい、大山、この刀の切味が知りたいんなら首を落される罪人のあつた時、賴んで切らせて貰うが好いや。』

登之助『いや、そんな縛られて居る奴の首を落して、何になるもんか、先方からも切つて來るし、此方からも切つて行つて、互に眞劍の勝負を爲ながら、ずばりと切ッたんでなくつちやア、ほんとの切味は知れやア爲ない。』

增本『はゝゝゝゝ、威張つた事を言ふぢやアないか、だが成程、貴公は其所までの意氣込だから、今のやうな天晴な勝が取れたんだ。』

久彌はまた橫間から『なアに、今の勝は、大山が怪我に勝つたんで、本統は私の方が強いんさ。』

增本『おい、平岡、そんな負惜しみを言ふもんぢやアないや、怪我や何かで、三本も續けて勝てるもんか、全く貴公が弱いんだわ。』

久彌は遂にぷり〳〵して、稽古道具を引擔ぎつゝ、足音荒く出て行きました。

が行きたい、先方が朝鮮だけになほ〳〵行きたい、日本人同士の軍とは違つて、相手が日本を馬鹿に爲た外國の奴だから、もし私が行けたら、遠慮も會釋も有りは爲ない、切つて〳〵切平げて、この刀の切味も知り、手柄も立て、我が國の恨も報いて、日本を馬鹿に爲たら斯んなもんだぞと、思ひ知らせて遣るんだがなア、あゝ行きたい、あゝ行きたいと言續けて居ました。

その內に、立花城主の小早川隆景も、太閤の命を受けて、朝鮮征伐に行く事になりました。

それを聞いた登之助は、さア堪りません、豫て識つて居る小早川家の家老の邸へ、直樣飛んで行きまして『もし、御家老樣、此方のお殿樣も、朝鮮を征めに行らつしやるさうですが、私も行きたくつて行きたくつて、この腕が吠へてなりませんから、どうか連れて行つて下さるやうに、貴君からお願ひなすつて下さいまし』と言ひました。

家老は快く頷きまして『好し〳〵、お前は平岡の久彌と同門で、大層劍術が強いさうだから、早速申上げて見やう』とすぐ本丸へ參りまして、從軍を願つて遣りました。

隆景は考へながら『まづ兎も角も逢はうから、その者を此所へ遣はせ』と家老を立たせて、折節傍に居た小姓の久彌を見返りつゝ『大山登之助と申す者は、其方の參る道場で、劍術を學ぶと言ふが、左樣か。』

久彌『はい、同門でございます。』

隆景『それでは其方存じて居やう、その登之助は、隨分劍術の遣へる者か、遣へるなら、朝鮮へ召連れて行つても好いが……。』

久彌は脫く負かされた恨がありますから、いえ極下手で、と言掛けました。

隆景は詞を續けて『……併し力量を試した上の事だ、もし弱い者であると、あれでも日本の軍人がと言つて、外國の者に嗤はれて、この御國の恥になるから、我が眼の前で試合をさせて、確と腕前を見屆けてからでなければ、連れて行く事は出來ないが、どうだ、其方は能く腕前を知つて居るであらう。』

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL　AWM2020.22.307

久彌は考へ直しました、登之助に大抵の者と試合をさせたら、彼奴が勝つに極つて居る、すると彼奴は朝鮮へ行ける事になる、たゞさへ忌々しい奴に、朝鮮で手柄をさせては、なほ〳〵忌々しいから、何でも強い人と試合をさせ、彼奴を氣味能く負けさせて、朝鮮へ行けないやうに爲て遣りたいと、斯う心で思ひましたから『はい、私は能く腕前を存じて居ります、登之助は中々の達人で、道場の先生を負かす位でございます』と詐りを言ひました。

隆景『さうか、それでは並々の者と試合をさせては、登之助の力量が分らないから、丁度次の間に詰めて居るその道の達人、權田修理と立合はせやう。』



久彌は窃に悦びながら『それがお宜しうございませう』と勸めるやうに答へました。

權田修理といふのは、この小早川家の劍道の師範役です、登之助はいくら強くつても、まだ十八の少年ですのに、お大名のお抱への劍術の師匠と立合つて、勝つ事が出來るでせうか、覺束ないものです。

第四

登之助はやがて隆景の目通りへ參りました。

隆景はつく〳〵見ながら『其方が大山登之助か、まだ年は行かないのに、中々劍道に秀でて居るさうだ、併し念の爲めに、權田修理と試合をさせた上で、朝鮮へ召連れるか、召連れないかを極めて遣はす。』

登之助は驚きまして『えーッ、あの名高い權田様と、私風情の若輩者と……。』

隆景『さうだ、是非一度立合はせる。』

久彌は肩で笑つて居ます。

隆景は次の間へ聲高く『こりや、修理、其方この庭前に於いて、只今是へ參つて居る若者と、一試合するやうに。』

修理は見たばかりでも強さうな、四十餘りの大身體の男で、忽ち二人分の稽古道具を引抱へ、庭から正面へ回りまして、立合の支度を爲ながら『若衆、是へ』と登之助を呼びました。



登之助は今は是非がありませんから、同じく庭先へ下りて行つて、稽古道具を着けました。

隆景『支度が好ければ早く。』

修理は『はッ』と答へて身構へ。

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL AWM2020.22.307

登之助も同じく身構へを爲ました。

修理は少しも猶豫を爲ないで『やッ』と掛聲して切込んだ。

登之助はそれを巧みに受流して、やゝ敵の隙を狙つて居ましたが、續いて切込まれた二の太刀を受損じて、右の籠手を健か打たれ、脆く負けて了ひました。

久彌はまた肩で笑つて居ます。

登之助は殘念で殘念で堪りません、固よりこんな達人に掛つては、よし何度試合を繰返しても、兎ても勝てないに極つて居ます、それ故たゞ一度で恐れ入つて、自ら引下りましたけれども、これが爲めに、もう朝鮮へ行けない事になつたかと、口惜涙を溢しました。

隆景『こりや、大山登之助。』

登之助『はい。』

隆景『其方の願を聞入れて、朝鮮へ連れて參るぞ。』

登之助は魂消顏で見上げました。

久彌も同じく魂消顏です。

隆景『どうだ、願が叶つて嬉しいか。』

登之助『いえ、お殿樣、いま私は御前試合で負けたのでございますが、それでも矢張りお連れ下さるのでございますか。』

隆景『さうだ、其方は勝負には負けたけれど、今のあの太刀筋なら年に合はせては天晴だ、實はまだ〳〵強いやうに聞いたけれど、それは全く話した者の誤りで、劍道の奥義を極めたあの修理へ、あれほどに立合へたら、朝鮮あたりの腰拔共を、相手にするには澤山だ、我が小早川の手の者と申しても、決して恥しくないから、必ず召連れて遣はす。』

登之助は勇み上つて『あゝ、左樣でございますか、こんな嬉しい事はございません、こんな嬉しい事はございません』と大變に悦びました。（次號で完結）

我輩の本願は天下の人をして全く錢を離れ無錢の邊に安心の點を定めて以て名譽の大なるものなるを知らしめんと欲するのみ

福翁百話

不思議な端書

掬月生譯述

（上）

一枚の端書が、朝食事の時の食卓の上に置いて御座いました。この端書は、後頸部から冷水をかけられたときのやうに、私の五體を悚然とさせました。私は何も此端書が怖いと云ふ譯では御座いませんでしたが、併し之が爲めにドウやら、味噌汁の味も、お茶の香氣も消失ッたやうな感じが致したには相違ないと、こゝに白狀をして置きます。

私の妻のお初は、呆れた顏で私を見ながら、

『貴郎まア、何處ぞお惡いので御座いますか。貴郎のお顏容と云ッたら、宛然幽靈でも御覽なすッた時のやうですよ。』

と不思議さうに尋ねました。

私は無理に落着き拂ッた風をして、

『まア〳〵好いから、食事を食べてお了ひよ。食事が濟んでから、悉皆分かる事だから。』

と申しました。それから食事が濟んだ後で、件の端書を妻に渡しましたが、妻も其文句を讀むが否や、吃驚した樣子で、

『オヤ貴郎まア、是は何の事でせう。如何云ふ譯なのでせう。』

と重ねて聞きましたが、端書には差出人の住所も姓名も書いて御座いません。それで文言は、

『今年の最終日前に、君は死ぬものと覺悟せよ。』

として御座います。

『如何云ふ譯ッて、多分これは惡戲の脅嚇と想はれる。誰の仕事かは知らぬが、惡いたづらにも程のあつたものだ。私は是から直に警察へ行ッて、此次第を委しく訴へねばなりません。』

と私が申しますと、妻も

『それが宜しう御座います、早く行ッて訴へてお遣んなさい。そしてその惡戲者が捕ッたら、終身懲役にでも成れば可いと、私は思ひます。』

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL AWM2020.22.307

と大層力ンでいひました。

私がこの不思議な端書を、目の前に差出したときに、警察署長の美留目氏は、流石職掌柄丈けあつて、熱心に文句を見詰めて居りましたが、

『ハテ不思議な端書だ、何にしても是れで又、大分警察が忙しくなつて來たわい。併し可う御座います、此端書は置いてお出でなさい。當警察に於ても、充分の探偵を遂げて、屹度この端書を書いた當人を洗ひ出してお目にかけませう。』

そこで私は、

『で、署長さん、此事件に就いて、貴官の御意見は如何でせう。』

と尋ねました處が、署長は私の顏をジツと視て、徐かに、

『誰か貴方に、不平を持つて居るやうな人物の、お心當りはないですか



ナ。』

斯う云はれて見ると、自分ながら不安心で堪りません。

『左樣です、左ういふ人物は、私の知ッてる所ではまア無いやうです。別に誰とも喧嘩した覺えはなし、その他にも不平を抱かれるやうな事は……、イヤ待つて下さい、考へて見ると一人私に向かッて……。』

『御覽なさい、有るでせう、其奴です、屹度其奴です。で、其疑はしい奴といふのは、一體如何云ふ風つきで、何處の何といふ者か、大略の素性を一ッ。』

と云ひながら、傍にあッた大きな帳面を取出して、卓の上に擴げ、

『さア一通り聞かして下さい』

と椅子の座臺を、兩手で持上げて座を進めました。



『實はその、店の錢函を弄ッて、賣揚げをチヨロマカしましたから、餘儀なく擲出してやつたのが御座います。ハイ名は池津累と云ふ小ッぽけな、コソ〳〵した好かない男で御座いますがナ。其奴が店から出て行くときに、例の捨言葉を殘して行きました、「旦那、この返報は屹度致しますから覺えて居て下さい」ッて、何と盜人猛猛しい奴ぢやア御座いませんか。』

『成程〳〵。』

と美留目氏は、深く考へ込んだ樣子で御座いましたが

『時に清田さん、貴方は何か、其男の書いたものを持つて居なさるだらう、それを見せて下さい。此端書の手風と比べて見たいのですから。』

と云ひますから、私は餘り馬鹿げた質問に呆れ返つて、

『それは無益でせう。斯樣端書を寄越す位の惡佼なら、手風だツて誤魔化すに違ひないから。』

そうすると、署長は威儀を正して、

『所がサ、黑人の目に掛つた日には、決して誤魔化すことは出來んのです。實際當署の探偵局には、貴方にもイヤ私にだツて、見分けることの出來ない手跡を、チヤーンと見分けることの出來る鑑定の名人が居るですからナ。』

私も是れには一言もございませんから、

『承知しました、では今夜の郵便で、池津の手跡をお屆け申すことに致します。』

家に歸ると直に、池津の書いた古手紙を三通、署長の許へ送りましたが、聞もなく斯樣なことはしなくても好かつたといふことが分かりました。といふのは、其翌る朝、獨逸ベルリンの消印のある手紙が、私の店に屆きました。是は池津累から來たので、紛れもない當人の直筆で御座います。用向は今度彼の地の或商會へ雇はれることになつたから、何卒貴方の店に居た時分、よく精勤したといふ證明書を私に書いて呉れろとの依頼狀でした。

何と厚かましい言分ではありませんか。無論私は刎ね付けてやりましたが、併し誠に好い時に、此手紙は參りましたので、例の端書は、當時幾千里と隔ツた所に居る池津累の書いたものでないといふことが、全く明に成りました。

して見ると、この不思議の端書は、抑も何處の誰から來たもので御座いませう。

これが晝となく夜となく、私を苦しめた疑問で御座います。私は常に戰々競々として、薄い氷でも踏んで居るやうな心持になり、例へば唯一本の針が座敷に落ちても、その音がチヤンと聞き取れる程、森とした物淋しい眞夜中に、覆面をして眼ばかり光らせて居る曲者が、何處からか忍び込み、ピストルか出刃庖丁を片手に摑んで、私の枕の上へ頸を延し、私の寢顏をジッと睨んで居るやうな夢を見ては、喫驚して目を覺したことが、眞個に幾度あつたか知れません。

元來犬が大嫌ひの上に、二三度犬に追ひかけられ、一度は咬ひ着かれたことのあるお初でさへ、大奮發で日頃仇敵のやうに思つて居る犬を、宅に飼はうと言ひ出しました。その時の言ひやうが面白い。

『凡そ何が厭だと云つて、犬ほど嫌ひなものは御座いませんが、大事な貴郎のお命には代へられません。早く犬を買ツて被居やい。』

そこで私はこの貞女の勸告に任せて、「熊」と云ふ逞ましい不器用に大きな猛犬を、一匹買入れましたが、此奴中々口まめな奴と見えて、鳴くわ〳〵、毎晩素敵に厭な聲を出して、下手な遠吠をしますので、家内も私も更に眠ることが出來ない。併し彼の怪しい端書の差出人が、若し猪小才にも我々の城廓たるこの茅屋に、夜襲を仕掛けることがあるとすれば、そのときこそは「熊」の水雷が、狙ひ濟して彼奴が咽喉笛に喰ひ下り、そこに大きな窓を明けてやるに違ひないと想へば、まア〳〵下手な遠吠位は、我慢して聞いて居てやらずばなるまいと、夫婦はいさゝか心強くなつたのです。けれども此忠實な猛犬が、水雷としての手柄を現はす時は何時來るのでせうか、イヤ遂に來ませんでした。

そこで私は此端書は、全く誰かの惡いたづらに出たものと、いよ〳〵それに決めて居りました所へ、隣家の富田さんが色を變へて飛んで來ました。

『清田さん、まア此端書を見て下さい。今朝、宅へ着いたのですが、俺はもう〳〵氣味がわるくて堪りません。』

と申しますから、

『ドレ拜見。』

と手に取ツて見ると、私の宅へ來たのと寸分違はぬ例の怪しい端書ですから、私もギヨツとして、

『私も之と同じな端書を、先々月受取りましたのサ。』

と一伍一什を話して聞かせました。すると富田は、い

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307

よ〳〵驚いた樣子で、

『何でもこりやア、人殺しをしたがる狂人の遣ッた事に相違ないと思はれる。ドレ警察に行ッて保護を賴んで來ませう。』

と大急ぎで驅けて行きました。しかし私の實驗から見ても、警察はよく私の友人を滿足させることが出來るか何うか、甚だ覺束ないと私は思ひました。

（下）

其後三月程經つて、今年も愈々殘り少なに成りましたから、私は尙ほ一層怖く成ッて來ました。或日ピストルを一挺買入れて、晝も夜も身の邊りを離さず、日の沒後は成丈け外に出ないやうにして、用心堅固に構へました。

その間にも警察では、頻りに骨を折ッた樣子ですが、端書差出人の名も住所も、宛然見當が付きませんでした。



ところが或日の朝、フト新聞紙を取ッて見ますと、復しても斯樣厭な雜報が出て居ました。

『去ぬる夏の初めの頃より當市中は申すに及ばず、全國の津々浦々に至るまで、差出人の住所も姓名も記さぬ、一種不思議なる郵便端書の配達されたる爲め、人々不審の眉を顰めざるはなし。其端書の文面は、名宛の人に向かッて、

「今年の最終日前に死ぬものと覺悟せよ」

と申渡したるものにして、差出人は一人なるか數人なるか、何れにしても其姓名所在を探り當てんと百方苦心したる警察の盡力も、愼む可し、總べて水の泡に歸したるが如し。さて此不思議の事件に就き、其筋の者の鑑定は、素より千差萬別なれども、就中最も耳を傾くるに足る可きは、件の端書が殺人狂の筆に書かれたるものなる可しとの一說なり。何は兎もあれ、此件は此末如何になり行くべきか、如何なる新事實によりて發見さるゝか、何れも世人の熱心に注意する所なる可し。』



ハヽアして見ると、この薄氣味の惡い目に遇ッて居るのは、富田と私ばかりではない、國中に何人もあるのだナと、私も始めて氣が着きましたが、扨斯う氣が着いて見ると、怖氣も大に耗りました。と云ふ譯は、如何にこの曲者が足を棺木にして立廻つた處で、鬼か化物でない以上は、全國幾萬の人々をおろしなみに、屠

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL　AWM2020.22.307

り終ふせることはヨモ出來まい。曲者の的が一人や二人でなくつて、大勢であつて見れば、的にされる方も聊か樂な譯ですから、私も數箇月以來、始めてゆつくりと眠ることが出來ました。

併しながら既に全國の津々浦々までも行き渡ツた怯氣といふものは、中々直ることではありません。有りとあらゆる新聞紙は、どれも〳〵爭つて端書事件を書き立て、中にも時々新工風の考を遣ツて見るので、評判の高い或一錢新聞紙は、件の端書を其まゝ寫眞石版に撮つて紙上に載せました。

處々方々から、各新聞社に流れ込んで來る手紙の數と云ッたら、大變なもので、殆んど箕であけるほど御座いました。扨その手紙は、端書差出人の捕まへ方に就いて、素人考への種々樣々な妙案奇策を書いて寄越したもので、中には實地に行はれさうだと云ふよりは、寧ろ餘りの斬新さに驚かれるのも御座いました。例へば、左る地方で古今獨歩の奇才、秀吉ナポレオンも其處退けと、我も許し村でも許すほどの大豪傑の名案は、たのは無論のことで、「不活潑」、「無能」、「寢ぼけてる」、「古ぼけてる」、「耄碌」、「腰拔け」など隨分手酷しい惡口が箭のやうに放たれました。甚だしいのは、この鹽梅では我警察の取締りは、支那朝鮮のボロ政府の取締りにも劣るなどと、口から出任せに罵倒する無責任の輩も御座いました。

爰に百萬圓の身代があると聞えた賣藥製造者「萬能丸」の主人は、この有樣を見て、社會公共の爲めだといひ、誰にもあれ彼の怪しの端書の差出人を探し當てた者には、金五千圓を與へやうとの懸賞を出しましたが、是さへ効力が御座いませんでした。

其後議會の開けた時に、或年若の議員は、如何かして自分の名を人に知られたいとの考へから、端書事件に就いて、大臣に質問を試みました。其時の模樣が、新聞紙には斯う書いて御座いました。

無記名はがき、議會の騷動

名無郡撰出議員洞尾福太郎氏は目下、全國に充滿して居る所の彼の不思議なる端書の出處探偵に就き、

全國に何十萬とある各所の郵便函の傍に、角袖巡査を晝夜引ツきりなしに立たせて置いて、郵書差出人の風體に、一々注意させたら何うだらうといふのでした。又或素人探偵先生は、彼の英國などで專ら行はれて居るブラッド　ハウンドの探偵法を用ふるが可からうと云ふ。それは如何いふ法だと聞くと、先づ其ブラッド　ハウンドと云ふ名犬を、遙々英國から取寄せて、之に彼の端書に書いてある文字の墨の香氣を臭がせ、然して後に其香氣を便りに、曲者の住家を犬に嗅ぎ當てさせやうとの注文で御座います。聊か泥棒を見て繩を綯ふといふ嫌ひもありますが、兎に角名案には相違ない。唯惜しいことは、曲者が何萬と書く端書に、果して一ツ墨を使つて居るだらうか、其邊を突止める術のないことです。此外これと同樣な奇想天外より落る名工風が、毎日編輯局へドシ〳〵攻め寄せて參りましたが、何れも皆例によつて例の通り、紙屑籠の埋め草、ストーヴの燒え草と成ツて了ひました。

巡査、探偵、警察の一まきが、諸方から口汚く罵られ警視廳は果して何等の方策を取りしものなるや如何と、內務大臣に質問したり

內務大臣はこれに答辯して云く、本問題に關し、本大臣は未だ何等の報告に接せずと（反對黨笑聲起る）日頃尊大に構へて居る貴族院すらも、とう〳〵此事件に關係することになりました。某の侯爵某の伯爵も例の無記名端書の家宅侵入に遇つて、一方ならず御機嫌を損じられたと申すことです。まア一口に申せば、國中何處の果てゞも、端書事件の外に談柄はないと云ふ有樣で、遂には外國の新聞紙にさへ、冷かし半分の記事を見るに至りました。

しかし斯樣に世界を騷がした本事件も、とう〳〵其內幕を見顯はさるゝ時節が到來しました。唯その發見が、どん詰りの最終日の當日に於てせられたのは、機敏の警察、聊か赤面の體で御座います。

扨も十二月三十一日の朝、寢覺めの惡るいこと夥しい。床の上にムックリ起上がつて考へて見ると、今日は是れ彼の怪しの端書の面に『今年の最終日前に君は死ぬ

ものを覺悟せよ』とある其文句の中の最終目、年の終と共に、人の生死のよ〳〵以て決着する日と思ふと、全く以て面白くない。勿論此端書に膽を潰して居る國中何千何萬の其内の、自分は唯一人であると覺悟して見れば、何もビク〳〵することはないやうなものゝ、さて人身御供の白箭の根が、何處の家の棟に立つかと思ふと、エ、復身體がぞく〳〵する。

最終日の夕方、事務所から宅へ歸ッて來ました時に、妻はキャッ〳〵と笑ひながら、

『貴郎、まア貴郎、實に、私やア實に可笑くつて、〳〵、眞個に可笑くつて、ア、苦しい。横腹が痛くッて、可笑くつて、ア、堪らない。』

と無性に笑ひこけて居りますから、私は驚いて、ヒステリア笑ひでも始めたのかと思ひ、

『こりやまア、如何したといふんだ、戯言ぢやアない。何時までも其樣馬鹿笑ひをしてると、お醫者樣でも呼んで來なけりや成らない。』

と叱るやうに申しましたが、妻は笑ひを止めるどころか、一層大きな聲で腹を抱へ、涙を出して笑ッて居ます。

『私やもう、可笑くッて、〳〵、笑ひ死に死んで了ひさうです。實に斯樣可笑い事は、二度と再びあるこつちや御座いませんよ。』

私は癪に障ッて成りませんから、大眞面目で妻の顔をジッと視て、

『可笑い〳〵つて、何が可笑い。理由も話さないで、解ると思ふか。』

と詰め寄せました。そうすると、妻は何とも云はずに、紫檀の違ひ棚の上から、一枚の郵便端書を取ッて來て、それを私が渡さうとしますから、

『何だ、復端書か。此事ア笑ひ事ぢやアないぜ。』

と怒鳴りましたが、妻は可笑さを漸と耐えた樣子で、

『まア好いから、讀んで御覽なさい、讀んで御覽なさい。』

と勸めます。手に取ッて見ますと、

『曩の端書を、光に翳して御覽可被成候。』

と書いて御座いました。

ハテナと云ふ氣が起りましたから、私は

『端書〳〵、彼の先の端書は何處に在る、早く持ッて來てお呉れ。』

と大聲を揚げました。妻は笑ひながら、

『其端書なら爰に御座ます。何もそんな顏をするには及びませんわ子。こんな可笑いことは、實に私やア生れて始めてですよ。』

と云ひました。それで私は彼の數箇月前に受取た氣味の悪い端書をば、急いでランプの燈に翳して



見ましたが、聽て私も止め度なく笑ひ始めました。それは其端書を讀して見ますと『今年の最終日前に君は死ぬものと覺悟せよ』とある文句の其下に

『若し起死回生の萬能丸一函、各藥種屋に於て十五錢、東京日本橋區通り一丁目の本丸調製所より郵送なら十六錢を、御用ひ無之に於ては、足下の絶命は、鏡に掛けて見るが如くに御座候。』

と書いてあつたからです。妻は私の笑ひ出したのを見て、更にニコ〳〵笑ひながら、

『それ御覽なさい、可笑いでせう。しかし貴郎、貴郎は此趣向を何と思ひます。』

と尋ねますから、

『ハヽア何と思うツて、一番器用に擔がれたのサ。萬能丸調製所の株を、もう百株買はうと思ふよ。』

と云ひましたが、私は其後この言葉の通り實行致しました。

凡そ國家を維持保存せんとする者は痩我慢の主義に由らざるはなし我封建時代に諸藩の競爭して士氣を養ふたるも此主義に由り封建既に廢して一統の大日本帝國となり更に眼界を廣くして文明世界に獨立の體面を張らんとするも此主義に由らざるべからず　痩我慢の說

時事解說

安岡秀夫

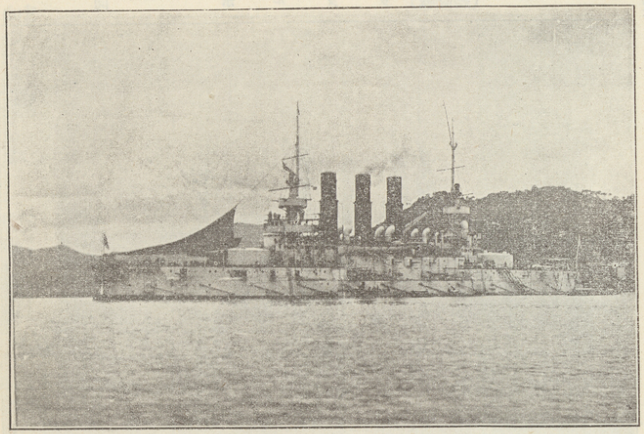
日露の開戰

少年諸君、いよ〳〵日露の大戰爭が始まりました。而も其戰爭の發端からして、我國の大勝利とは、實に祝す可き次第ではありませんか。戰爭の始まつた原因に就いては、是れまで幾度も申上げました所にて御承知の通り、露國が無法にも滿洲を占領し、果ては朝鮮さへも、我物にしやうとする野心から起つたことで、我國は之に對して、色々と談判をしましたけれども、露國は更に改心の模樣が見えませんから、遂に去月六日を以て、日露の外交が破れた旨を、我小村外務大臣より露國公使ローゼン氏まで通知した次第で御座います。

右の通り日露の談判は、二月六日を以て破れましたから、最早戰爭を始める外はないと、我政府に於ても決心しまして、同じ六日の日に佐世保にある我艦隊を、敵地へ向つて出發させました。

我艦隊は、其翌日朝鮮近海に於て、艦隊の中から別に小艦隊を分ち、陸軍の運送船を護衞して、仁川に向はせ、本隊は直に旅順口に向ひました。

△水雷の襲撃　扨て旅順に向つた本隊は八日の夜、敵艦襲撃の目的を以て、水雷驅逐隊を旅順の港口に遣はしました。



旅順にて破壞されたるレトヴィザン（戰鬪艦）
（ツサレヴィツチは之と同形なれば略す）

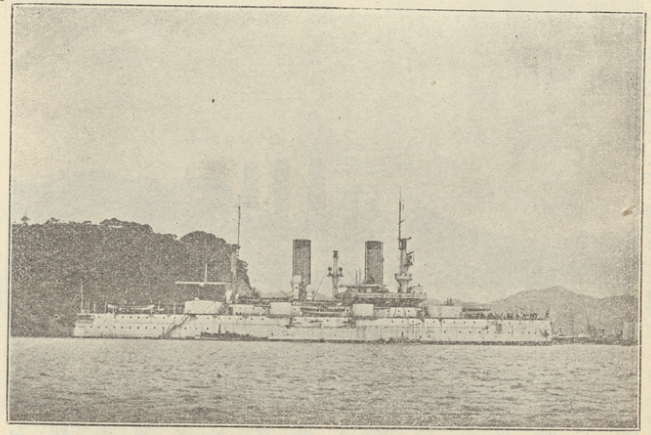
然るに露國の艦隊は、此時港の外に錨を卸して居ましたが、其軍艦は戰鬪艦レトヴイザン、ツエザレヴイツチ、ペレスヴキツト、ポビエダ、ペトロパウロスク、ポルタワの六艘、裝甲巡洋艦バヤン、巡洋艦パルラダ、デイヤナ、アスコルド、ノーヴイツクの四艘の外、水雷驅逐艦及び水雷艇を以て編成されて居ました。

我驅逐隊が、敵の艦隊近くへ押寄せましたのは、夜の十二時頃でして、敵は斯る事とは夢にも知らぬか、更に警戒を加へて居る模樣が見えませんから、天の

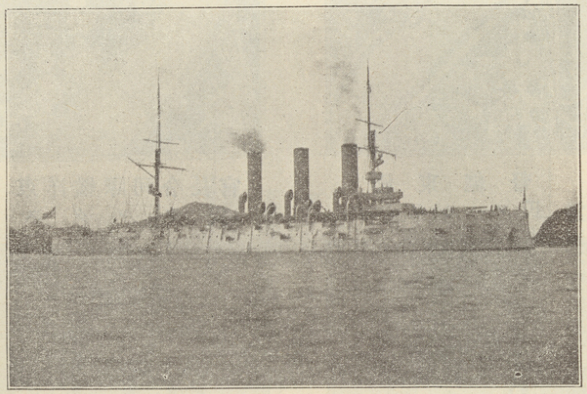
與へと我驅逐隊は、直に水雷を發射して、レトヴイザンツエザレヴイッチ、パルラダの三艘に物の見事に命中させて、直に其場を引揚げました。水雷を喰つた三艘の露艦は、何れも大損傷を被つた筈ですから、假令ひ修繕を加へても、再び役に立たせるには容易なことでないでせう。猶ほパルラダは、其後全く沈沒したさうです。此時に於ける露艦の死傷は、死亡七名、負傷八名だつたと申すことです。

△旅順の總攻撃●●●●●翌九日の午前九時過ぎに、我艦隊は三艘の軍艦を出して、敵狀を窺はせた處が、昨夜の失敗で大に元氣を落し、三艘の軍艦に向つてさへ、發砲する氣力がないと云ふ有樣で御座います。併し敵の艦隊は、旅順の砲臺の下に陣を作り、其砲臺の助を借りて、我に當らうとする考へと見えましたから、我艦隊では成る可く、砲臺の砲彈の屆かぬ處まで、敵の艦隊を誘き出さうとしましたけれども、中々出て來ないから、いよ〳〵此方から押掛ける事に決しまして、東鄉司令長官は『今より敵の主戰艦隊を攻撃す』と各艦へ信號を與へ、單縱陣を作り、舳艫相含んで勇氣凛然と旅順口へ向つて進發しました。

同　ポルタワ（戰鬪艦）



同　パルラダ（巡洋艦）



我艦隊の敵前に現はれたのは、恰も正午でした。敵の艦隊は我艦隊の押寄せて來たのを見て、大に狼狽し、我勝ちに港内に逃げ込まうとする模樣ですから、我艦隊は第一番に、三笠艦から發砲し、各艦之に應じて盛に敵艦を砲撃しました。敵の艦隊も最早逃げるにも逃げられず、我に向つて應戰しましたが、我艦隊の射撃は頗る巧で、其發射する砲彈は殆ど悉く敵艦に命中する、其反對に敵の艦隊より打ち出す砲彈は、少しも我軍艦に觸れず、唯彼の砲臺の砲彈だけは、割合に狙ひが好くて、是が爲め我艦隊に多少の死傷者を生じました。此際我將卒の戰爭に從事する有樣は、頗る沈着であつて、平日の演習を行ふに異ならず、殊に水雷驅逐隊が砲火を冒して、

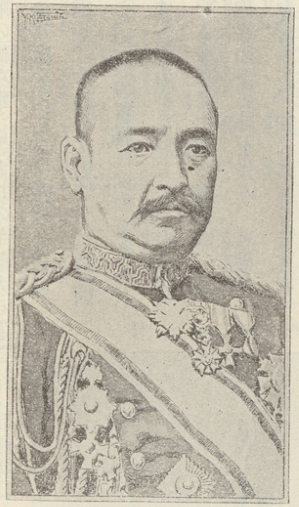
に、其れを事ともせず、此襲撃を斷行した我海軍々人の大膽不敵なる、實に驚き入るの外はありません。之に反して露國の艦隊が、我水雷に對して何の用心をも加へず、茫然として居て瞬く間に、三艘まで遣付けられたとは不覺の至りと云はねばなりません。殊に聞く所に依りますと、此夜露艦の乘組員は、大勢上陸して芝居を見物して居たとのことです。其間拔さ加減、笑ふに堪へたる次第ではありませんか。孰れにしても日露戰爭の幕開きに、我海軍が斯る大功を奏したのは、實に幸先の好いことで、此向きで進んで行けば、我海陸軍の連戰連勝は疑ひもないことでせう。

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL　AWM2020.22.307

聯合艦隊司令長官
東鄉平八郎氏



總理大臣
桂太郎氏



東洋艦隊司令長官
スタルク氏



極東總督
アレキシーフ氏



（ス氏はその後旅順敗軍の爲め免職されました）

敵艦に肉迫する樣は、極めて壯觀であつたと云ふことです。

扨て此戰爭は、四十五分間で中止と爲り、我艦隊は列を正して引揚げましたが、此戰爭中に、露西亞の戰鬪艦ポルタワ、ペトロパウロスク巡洋艦ディアナ、アスコルド、ノーヴキック、水雷母艦エニセイの六艘が、又々大破損を蒙むり、其外我砲彈に依て傷を受けた軍艦も少なくなかつた、其上に死亡者は軍艦で九名、砲臺で一名、負傷者は軍艦で五十三名、內士官二名、砲臺で三名あつたさうです。

又我艦隊では、富士艦砲術長少佐山中幹、同艦分隊長心得中尉三浦容夫、初瀨艦乘組少尉候補生梶村文夫、同艦乘組三等下士町田軍次の四氏、其場に於

同　デイアナ（巡洋艦）



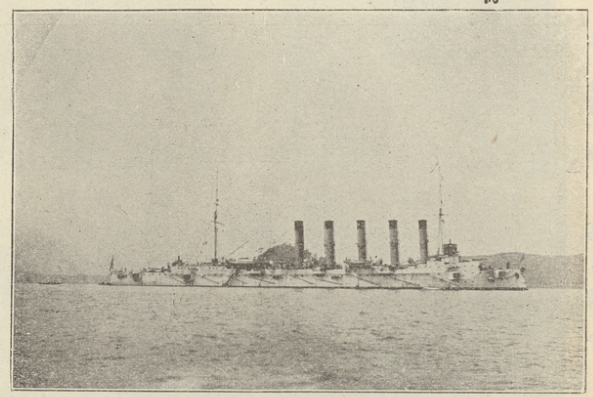
て名譽の戰死を遂げ、負傷者は、三笠艦機關長機關大監山本安次郎、初瀨艦航海長中佐千阪督次郎、第一艦隊參謀大尉松村菊勇、第一艦隊主理吉村幹三郎の諸氏を始め、二十八名に及びました。其內富士艦乘組上等信號兵曹小野光長氏は、佐世保へ送られて治療中、心臟病を發して死亡しました。

△仁川の海戰　茲に又去月七日、朝鮮近海で我艦隊に分れた分遣隊は、陸兵の輸送を護衞して、翌る八日の朝同港に着し、滯りなく陸兵を上陸させました。然るに此時仁川には英米佛等の軍艦の外に、敵國たる露西亞の巡洋艦ワリヤーク、砲艦コレーツの二艘が碇泊して居まして、我艦隊に向ひ、戰を挑む模樣が見にましたから、翌九日の正午、我艦隊は

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL　AWM2020.22.307

いよ〳〵右の露艦と、仁川港外に於て砲火を交へました。併し僅か二艘の露艦が我艦隊の力に抵抗し得る道理はない。僅か三十五分間で、二艘とも大破損を被むつて港内へ遁込みましたがとう〳〵其れなりに沈没して仕舞ひました。此戰爭で露西亞の死傷は非常に多かつたが、生殘つたものも一旦は悉く我捕虜となり、更に許して貰うことになりました。我艦の方では、此戰爭で少しも損害を受けず、一名の負傷者もありませんでした。此戰爭は恰も、旅順の總攻撃と同じ時刻だつたのです。

△露艦の暴行　茲に露西亞の軍艦の中で、裝甲巡洋艦グロンボイ、ロシヤ、リユーリツク及び巡洋艦ボガチユイリの四艘は、戰爭の始まる前から、浦鹽斯徳に碇泊して居ましたが、何と思つてか去る十一日滊船一艘を隨へて、我北海道の近海に現はれ、同日午前十時頃渡島沖に於て、奈古浦丸と云ふ僅か百八十四噸の小滊船に大砲を打掛けて沈めて了ひました。此時全勝丸と云ふ船も、右の露艦に追掛けられたが、辛くも虎口を脱して松前へ遁込みました。戰爭に敵國の滊船を分捕るのは當前のことですけれども、始めから何の沙汰も手續もせず、出抜けに打沈めると云ふのは亂暴至極の話で、露西亞人の野蠻なことは、是れでも十分に分ります。斯樣に露西亞の軍艦が、我近海に徘徊するに就いては、何時海岸の都會村落を砲撃されるかも知れないとて、北海道や東北北陸の日本海に面した地方では、



同　アスコルド（巡洋艦）

大に警戒を加へましたが、間もなく右の露艦は、浦鹽斯徳の方へ歸つた模樣で御座います。

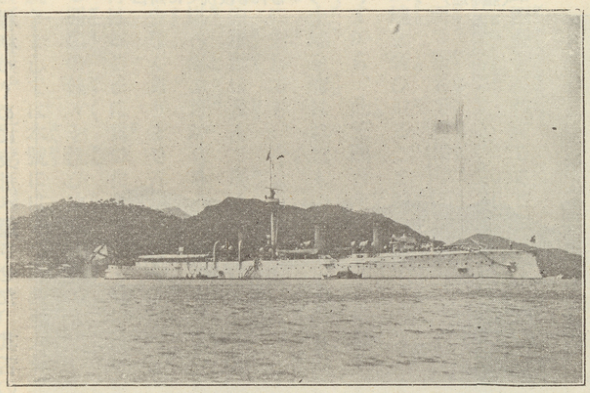
●●●●●

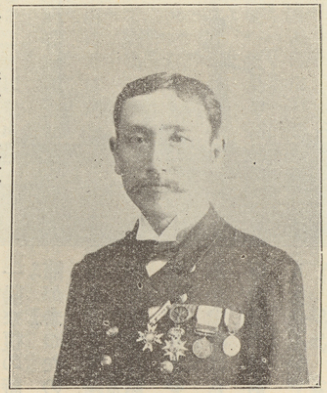
△宣戰の詔勅　日露の干戈こゝに彼れて、戰端の開かれましたに就いては、去月十日の夜を以て、愈々宣戰の詔勅を發せられました。

國の仇

少年諸君、露西亞を討つて、國の仇を報ひる時節は、今や漸くにして到來しました。彼露西亞は、表面は歐羅巴の文明國の仲間入をして居ますけれども、其實非道極まる末開國で、國内の政事は、亂暴狼籍を事として人民を苦しめ、外に向つては種々の狡猾なる手段を廻らして、他國の土地を掠め取り、只自國の領分の廣くなるのを手柄として居る、信義もなければ恥も知らぬ無法者ですから、他の列國は勿論、露國の中でも多數の人民は、露國政府に向つて、多年來恨を抱き憤を含んで居た次第です。殊に我國の如きは、百年來〳〵彼の無禮を蒙むり、損害を受けた中にも、日清戰爭のとき、我幾萬の軍隊が、屍の山を築き、血の河を流し、ヤットの思ひで占領

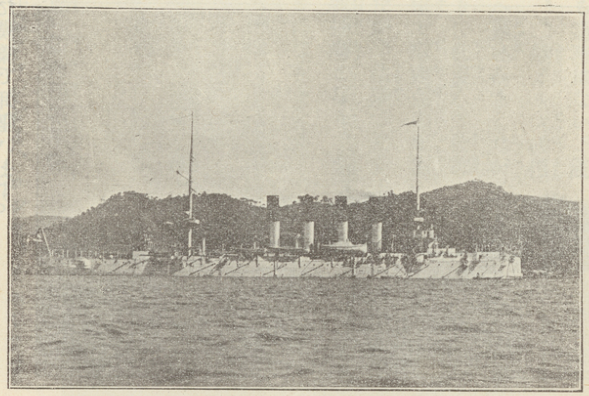
同　ノーヴイツク（巡洋艦）



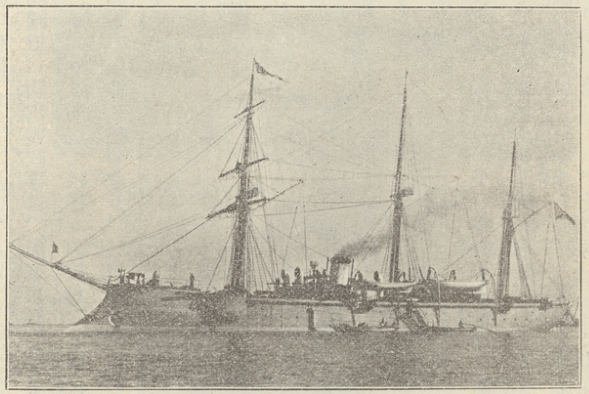


仁川分遣隊司令官
瓜生外吉氏

した遼東半島を、東洋の平和の爲め抔と、體裁の好い口實を設けて、權柄づくめに支那へ還させた、其舌の根の乾かぬ內に、己はヌク〳〵と其跡へ坐り込んだのは實に我國を蹈付にした無禮極まる所置であつて、此遺恨は我五千萬の同胞が、寢ても寤めても忘れられぬ次第でありましたが、今や彼が已惚と增長とは、適々自滅を



仁川にて沈沒したるワリヤーク（巡洋艦）



同　コレーツ（砲艦）

來す原因と爲り、精强無比なる我海陸軍は、彼の野蠻國を足下に蹂躙つて、東洋の外へ追拂つて了ふ事になりました。誠に十年の鬱懷一時に開けて一陽來復の時節が參つたのであります。何と愉快な話ではありませんか、喜ばしい次第ではありませんか。聊か祝意を表する爲め諸君と共に萬歲を唱へませう。

天皇陛下萬歲　海陸軍萬歲！

露國無禮の條々（第一）

安岡秀夫

今度日本が露西亞を征伐することに爲つた理由は、「時事解說」の欄に記してある通りですが、元來露西亞と申す國は至て橫着で狡猾な國で御座いまして、常に他國の領地を奪ひ取ること許り仕事にして居る厄介な代物ですから、此三四百年來露西亞の爲めに國を滅ぼされ土地を奪はれたものは幾つあるか知れません。日本に對しても、今より百年ほど前からして、度々無禮の擧動に及んで居ます。其中には我國民たるもの〳〵堪へ忍ぶ可からさる侮辱損害を蒙むらされた事實も少なくありませんから、今度いよ〳〵露西亞を遣付けることに爲つたを幸ひ、茲に彼が日本國に對する罪惡の條々を洗ひ立て〳〵遣ることに致しました。就きましては本號には先づ露西亞人が北海道に於て亂暴を働いた顚末を申上げませう。抑〳〵我國人が始めて露西亞人を見たのは、今を距ること百五十七年前、德川將軍吉宗の代だと申すことで、其露西亞人は帆前船三艘に乘込んで、陸奥（陸前）牡鹿郡の沖合に來り、我漁師と有合の品物を交易し、更に安房國天津村に着船して食料を買入れたそうで、是れが日露人顏合せの始まりです。（但し蝦夷人は其前から露西亞人を知て居ましたでせう）其後安永七年蝦夷（今の北海道）の松前へ貿易を請ひに參つた露西亞人がありましたが、寬政四年になりまして、露國の使節たる海軍少尉ラクスマンなるもの、我國の漂流人幸太夫なるものを引連れて蝦夷へ來着して、通商を求めましたけれども、我政府にては之を斷はつて還しました。其頃からして我政府は露西亞に對して大に用心を加へ、蝦夷の備を固むることになりました。其後文化元年（千八百四年）に露國皇帝から、侍從レザノフなるものを特派使節として我國に遣はし、右使節の一行は我漂流人四名と共に長崎に着船して、皇帝アレキサンダー一世の書翰と使節の口上書を差出して更に通商を求めましたけれども、我國は例に依て其請求を斷はりました處。

レザノフは大に不快に感じたる模様にて立去りました。其れは翌る文化二年三月のことで御座いました。偖てレザノフは長崎からカムサツカに歸り其れから亞米利加を經て歸國しましたが、此カムサツカから亞米利加へ渡つた船は露西亞の御用船で、其船長は海軍大尉ノオストーフと申すものでした。然るに此フオストーフは今度レザノフが日本で使命を果すことが出來なかつた殘念話を聞いて大にイマ〳〵しがり、此腹癒に一つ日本人を苦めて遣らうと考へたものらしく、文化三年九月十一日と云ふ日に、樺太の楠古潭（今のコルサコフ）へ亂入することになりました。

此樺太は今でこそ露西亞のものになつて居るけれど、其當時は立派な日本の領分で、松前家の支配に屬し、松前の役人が右の楠古潭に出張して、蝦夷人を取締り漁業をさせて居りましたが、毎年秋分になると右の役人は松前へ引揚げるの例でして、此時も楠古潭には番人の日本人七名と、其他は蝦夷人許り殘つて居りました。偖てフオストーフは楠古潭に參る前に、矢張り樺太のラフイトマリと申す海岸に船を寄せて或る蝦夷人の家に押込み、其家の息子十七八歳のものを捕まへ、息子の父母が泣き喚いて留めやうとするものを、鐵砲を打掛けて嚇しつけ、トウ〳〵其息子を引攫つて行つて仕舞ひました。其時眞鍮の板に數行の露西亞文字を鐫付けたものを殘して行きましたが、其文字の中には

日本の奉行共何時までも心得違ひをして交易を許さぬと、是から時々日本へ侵入して遂には土地を取て仕舞うぞ

と云ふ意味の文句もありましたさうです。

斯くてフオストーフは九月十一日の朝三十人許の同勢で、楠古潭に上陸して松前家の役所に亂入し、日本人四名を縛り上げて船の中へ連れ込み、役所に在る米六百俵の外に酒其他の品物を奪ひ取り、十一軒の家と漁船や網など殘らず燒拂つた上其處に祭つてある辨天樣の御神體まで奪ひ取て行きましたが、斯樣な亂暴は十一日から十七日まで續きまして十八日に漸く就れへか立去りました。是れぞ即ち日本人が露西亞人の無禮を

受けた始まりです。

フオストーフの一類は斯樣な亂暴を働いても、猶ほ飽き足りませんでしたか、翌る文化四年の四月に又々擇捉島に押寄せました。

是より先き露人樺太を侵したと云ふ報知が江戸に達したから、幕府では大に驚いてます〳〵蝦夷の兵備を嚴重にすることに爲り、擇捉島の如きも函館奉行の下役のものが出張して居ました處、同月二十三日擇捉の苗穗と申す處に、右のフオストーフ等が二艘の船で遣て來て、大砲を打掛けて上陸し、土地の番人五郎次、左兵衞外三名を生捕り、米鹽衣類などを奪て家を燒拂ひ二十七日の朝になつて立去りました故、紗那と申す處



に居る函館奉行の下役戸田又太夫、關谷茂八郎等は急ぎ防戰の用意をして露人の再來に備へました處、二十九日になりまして二艘の露船又又押寄せて二十八人程紗那へ上陸しました。此時日本人の方では兵器など不充分でしたけれども、兎に角此露人を防ぐ丈けの人數はあつたから、彼等が上陸するや否、速に戰を開けば好かつたのですのに、右の又太夫茂八郎等は彼等の上陸した目的が或は何事か請求する積であるかも知れぬと想像して、成るべく事を穩かに濟ませやうと思ひ、白い布片で拵へた旗を振つて、此方が平和を望む意を示したけれども、彼等露人は之に頓着せず、ドン〳〵鐵砲を打掛けて參りましたからトウ〳〵

本當の戰爭になりまして日本人の死者三名、傷者三名を出しましたが、勝負決せぬ内に日が暮れたので露西亞人は船へ引揚げました。

其翌日になり我役人等は到底此場で露人を追拂ふことは出來ないと認め、擇捉から國後へ引揚げました。途中で又太夫は露人の爲めに不覺を取つたのを殘念に思つて自殺しました。

其後で露人は思ふ儘の亂暴を働き役所の兵器を始め食料器具等を澤山掠取り、家を悉く燒き拂ひ、五月三日になりまして凱歌を揚げて立去りました。

其れから彼等は途中得撫島に立寄て再び樺大の楠古潭に參り松前の兵卒が少々居たのを追散らし其近海で日本の官船一艘、商船二艘を押へて荷物を奪取り船は燒て仕舞ひ其れから利尻島へ着船して嚮に樺太擇捉で捕へた日本人を殘して行きました。即ち北海道の北部は此時露西亞人の爲めにサン〳〵な目に遭たので、其地方の人民は露西亞人のことを赤人、露西亞の船を黑船と呼び、何時黑船が沖に見へるかも知れぬと其一兩年は一日も安き心はなく、幕府でも之が爲めに一方ならぬ心配をしたものです。事柄の大小は違ひますけれども、丁度先月四艘の露船が日本海で我商船を打沈め、北海道から東北北陸の沿海地方で大に警戒したこと〻能く似て居るではありませんか。

（未完）

第五回　懸賞作文

題　『海戰の大勝利』

賞品

當選者二名は純銀製『少年』賞牌と外に小寫眞器械その他優等者三十名には何れも純銀製『少年』賞牌

旅順の大海戰は、皆さん御承知の通り、世界にためしの無い海戰で、之に勝利を得た日本の功名は、是れ亦世界にためしの無い大功名でございます。就いては皆さん、此海戰に付いてお考へ附のことを、何でも宜しうございますから、上手に書いて御覽なさい。當選者優等者には、前に記す通りの賞品を呈します。その約束は

一文章は三百字以下のこと
一文字は一行二十一字詰に明白に書くこと
一宿所姓名及び生年月を記入すること
一父兄か學校の先生に署名捺印してもらうこと
一封筒の表に必ず「少年懸賞作文」と記すこと
一募集〆切は三月十二日最終便までとす

尙は當選の等級には、年齡も勘定の中に入れますから、小さい方も其積りで澤山お送りなさい。

第四回　懸賞作文當選

題　『吾家の飼物』

當選（寫眞ブックと賞牌受賞）　埼玉縣大里郡岡部村字普濟寺　強瀨貞次郎（十四年十一箇月）

僕の家の馬は、ことし五才で赤色なのである。僕は毎朝、麥をすこしとかひばをやり、學校から歸ると、又かひりようするのである。此馬は大層おとなしくつて、走るのが早くつて、競馬にいつも一着か二着になります。競馬に出す時は、麥をすこしに人參や卵をくれる、澤山くれすぎて、お父さんに叱られたこともあります。此間僕が早く起きて、馬にかひりようして居ると、役場から手紙がきて、お父さんが讀んで馬の檢査だと言ひました。若し此檢査に合格すると、戰地へ向ふのだと思へば、かはいそうで仕方がない。それから馬に、豆や麥を澤山やると、馬は知らずによろこんで食べました。月曜の朝、お父さんが馬をつれて檢査に行つた、僕は學校まで乘つて行つて、門のところで別れました。お父さんは夕方歸つたが、馬はかへりません。

當選（賞品同上）　東京市麴町區平河町四ノ六　岩井增子（十一年三箇月）

私の家のカナリヤは、藝は出來ませんけれども。よくさへづります。卵を產む時に、人形をかごの前にかざつて置きましたら、カナリヤが人形の髮をみんな取つて、ぼうづにしてしまいました。どうしたのかと思つて、よく見ますと、親鳥が髮を、巢の中にはこんでをりました。きつと卵を暖めるのでありましよう。今は其子が大きくなつて、親のようになりました。親がさへづり方ををしえたから、よくさへづります。鳥のようなものでも、かようによく物をおぼえますから、私たちは學問をよく、おぼえなければなりません。

優等（賞牌受賞）　埼玉縣浦和町裁判所官舍　黑田誠（十四年二箇月）

僕の家には、一疋の猫が居ます。それは僕の叔父さんが、洋行の歸りに、印度から買つて來て下さつたのです。それが此間鎖をはづして逃げて、隣の葡萄の木の棚へ上つて、その實をしきりに食べて居る故、隣の叔父さんが、コラと云ひますと、頰べたを叩いたり、御尻を叩いたりしますので、叔父さんが棒を持つて追ひますと、急いで屋根へ上り、往來に飛び下りますと、大きな犬が、ワンワンと吠へましたので、うろたへて家の格子の所で、キャッキャッ鳴いて居ました。それから御父さんが開けてやると、急いで家の中にとびこんで、隅に小さくなつて居たには、家中大笑をしました。

優等（賞品同上）　讃岐國仲多度郡龍川村字金藏寺　神尾毅一（十一年十箇月）

僕の家に一匹の猫が居る、所へ一匹の子犬を貰いました。そうして其犬にお手をお貸しと云ふ藝を仕込み、若しそう云つた時に、手を出さないと、ばつにお菓子も御飯もやらず、手を出した時には、御飯や御菓子を澤山やりました。此樣にならしたから、犬は手を出さないと、飯や菓子がもらいないと思つたと見へ、或時猫が、餘念なく飯を喰つて居る所へいきまして、何べんとなく猫の背に手をおいて、其猫が飯をくれるのをまつて居ました。僕がいつて見ると、猫が飯をくれないといわんばかりに、ワン〳〵と吠へました。僕も犬の無邪氣なのには、おもはず笑いました。

優等（賞品同上）

東京市下谷區仲徒町二ノ六一　小島照子
新潟縣中蒲原郡七谷小學校生　高橋渡
對馬國雞知村　高瀨尙樸
上野國吾妻郡中五條町二八　田中ときわ
山口縣佐和郡右田村　長松武二
出雲國八束郡秋鹿村　加藤より
東京市日本橋區濱町三ノ一　服部琴太郎
佐賀縣東松浦郡濱崎村字濱崎　櫻井朋治郎
北海道松前郡福山唐津內町　岡田三郎
高知縣幡多郡才角　片上順子
橫濱市若葉町三　須藤みよ
長崎市今籠町二九、永見方　高谷正雄
茨城縣新治郡田余村字上高崎　矢口のぶ
盛岡市停車場構內役宅　木村榮次郎
弘前市字徒町川端町一、山戶方　後藤正太
加賀國江沼郡山中村八ノ二七　岡田勝作
信濃國木曾福島町　下邨さだ
東京市芝區芝公園七ノ三　太田しば子
能登國輪島町字河井米萬方　高森甲午郎
京都市衣棚下立賣上る　奧平安
大阪市北區第一北野小學校生　楠嶺三
橫濱市西戶部町縣廳官舍三六　川本高武
福井市尾上町六七　石川確
岩代國福島町尋常高等小學校　原田千代
鹿兒島市新照院町一二四　橋口伴則
秋田市長野下新町末南丁大井方　西村資治
山形市圓應寺町二一五七　齋藤たま
東京市淺草區馬道町三ノ一〇　田村宗次

懸賞考物答案

本間定治案



「これは外國から新しく購入れた軍艦でしよう」

一等賞（一人）

北海道札幌區南一條西三丁目

本間定治　滿十四年

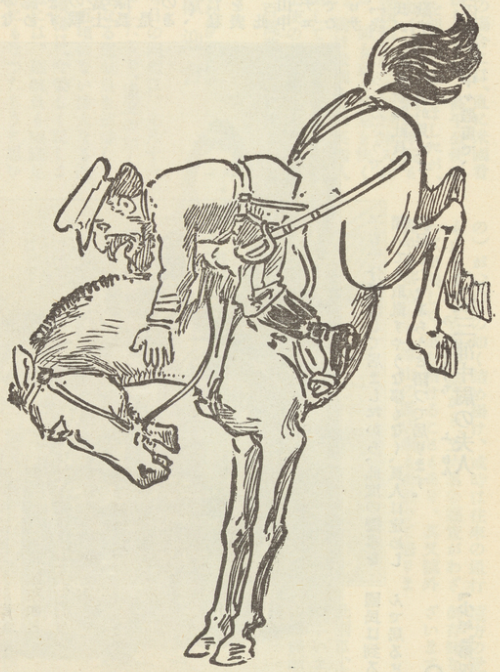
二等賞（二十人）

京都市堺町六角下ル　須田國太郎
東京市麻布區霞町四　吉見信一郎
陸中國黑澤尻下川岸一二〇　工藤德藏
福井縣敦賀町蓬萊四六　北川韶太郎
常陸國水戸市上市備前町三〇　藤本壤治
伊勢國四日市市藏町五　吉田てい
岩手縣稗貫郡花卷川口町天神下　柴田政治
東京市芝區愛宕町二丁目一　島崎彌之助
長野縣小縣郡城下村字御所　田玉政喜
東京市淺草西鳥越町三　鈴木るい
山口縣防府町宮市今市町　河村尙甫
東京市淺草區茅町二ノ三一　鴨下中雄
千葉縣香取郡高岡村字川崎　青野源四郎
東京市芝區愛宕下町四ノ北一　小林信敏
越中國氷見郡氷見町南中町　宇波耕策
埼玉縣北埼玉郡騎西高等小學校生　渡邊政之助
東京市牛込區早稻田中學校奇宿舍　三好俊
武藏國桶川町關口商店　都築豐次郎
東京市牛込區辨天町一四四　鶴見守雄
京都市油小路錦町上ル　南部玉泉

第六回

懸賞考物

北澤樂天出題



◎畫題の說明　この畫は靈西亞の兵士が、馬から落ちさうになつて居る所です。落ちた時の兵士の格好と馬の形は、どんなになるでしようか、畫にかいて御覽なさい。善く出來た方には、例の通り贈賞いたします。畫の寸法は横三寸七分、竪三寸の中に、位置よく上手におかきなさい。

◎投案の心得　左の通り定めます。

一答案は云ふまでもなく自分の意匠、自分の畫なるべきこと
一自分で作つたことを證する爲め答案の同紙中に父兄か學校の先生に「本人自作」と書き入れ捺印してもらうこと
一答案は半紙一枚の中に畫と宿所氏名、生年月日、父兄又は敎師の證明等殘らず書き入れること
若し又畫の說明を要する時は是れも畫と同紙中に書き入れること
一文字は明白に書くこと
一答案は必ず封筒の表に「少年考物答案」と書き入れること

特に少年と書くことを忘れぬよう注意すべし
一答案募集〆切は三月十日最終便までとす

◎懸賞の品々　答案者の中から一等一人、二等二十人を撰び出し、左の品々の中お望みに依り、何れでも一品を贈ります。

玩具（滊車、軍艦、人形の類）硯箱、裁縫道具、眼醒し時計、はこせこ、寫眞ブック、文庫、時事新報切手半年分（以上一等賞）◉玩具、吹風琴、リボン花簪、水彩繪具、手帳、束髮櫛、時事新報切手一箇月分（以上二等賞）

雜報

○故山中少佐の遺族

先月八九兩日の旅順海戰は、一朝にして露國東洋艦隊の大部分を破滅させましたので、我が海軍々人の忠勇武烈なることは、獨り我が國人のみならず、世界各國の均しく認めて驚喜歎賞する所でありますが、此海戰に早くも名譽の戰死を遂げられた將校は、富士艦砲術長山中少佐、同分隊長心得三浦中尉等の人々で、是等の人々の名譽は、歷史のあらん限り、永世朽ちる時なく、且つ其功勞を目前に認めた私共は、特に厚く感謝の意を表さなければ成りますまい。此處に揭げた寫眞は、即ち山中少佐の令夫人、及び令孃チエ子（七）令息武（三）の三人でございます。令夫人は名をヒサ子と申しまして、今年三十一歲に成られるさうですが、夫人の父土屋半四郎氏が、時事新報社員に語つた物語の中に、左の感歎すべき言葉が見えました。

山中の家庭は、軍人性質の事とて中々嚴重で、また、三浦中尉の令夫人は、名をアヤ子と申しまして、まだお歲も若いのでせうが、同中尉の名譽の戰死を聞くと共に、健氣にも綠の黑髮を落されたと申すことです。同夫人は又、或人に向ひまして「軍人が戰に出て、生きて歸ることの望まれないのは、覺悟の前ですから、今度眞人の戰死は、まことに滿足に思つて居ります』と語られたさうですが、軍人の妻女は、皆斯くありたいものと思ひます。



山中少佐の遺族

○英國民と林公使夫人

英國は同盟國だけありまして、先頃仁川旅順の勝報を聞くと均しく、上下孰れも他國の事とは思はず、恰も自國の海軍が大勝利を得たかのやうに喜んで就したさうですが、我が駐英公使林子爵の令夫人は、この程日本兵の戰場で病氣に罹つたり、又は負傷したりする者の爲めに、救助資金の募集を初められました所が、英國民は到る所、熱誠を以つて、續々其寄附を申込んで居ると云ふことでございます。

○マギー女史の好意

『少年』第四號に、米國の看護事業に經驗あるマギー女史が、日露愈〻開戰の場合には、直に米國看護隊を率ゐて、我國に應援したき旨、高平公使の許に申込んだと云ふことを記して置きましたが、同女史は近頃に至り約の如く、最早出發の準備も出來上つたからと、看護應援のことを再び申入れましたに付き、我が政府は、同女史の好意を快く承諾したと云ふことです。尙ほ米國人は、英國人と同じく、一般に我國に對して、非常に厚い同情を表し、各地方から高平公使の許に申込んだ義捐金のみでも、先頃既に七百萬弗（？）に達したといふ報知が參りました。

○盛大なる歡迎會

日本の新購入軍艦日進、春日の兩艦は、先月十六日無事橫須賀に到着しましたので、豫定の如く、わが東京市民は、兩艦の主なる廻航員を招待して同十九日日比谷公園内で、近頃にない盛大なる歡迎會を催しました。その模樣は、今委しく記しませんが、兎に角市民の好意には、廻航員も嘸滿足し、又歸國の好いお土產話にもなつたらうと思ひます。

○昨今の時事新報社

この度日露海戰の捷報を、第一番に全國人民に知らせましたのは、時事新報の號外でございます。之を初めとして時事新報は、必要ある毎に其都度號外を發しまして、最も迅速に、最も精確に、海戰其他の情報を報道して居ります。そこで開戰以來、本社の近邊は、毎日々々千人足らずの號外賣り（號外だけを買ひ求めて、市内を賣り步くもの）が、雲霞の如く詰め掛け、或時は往來の通行も止まつて了ひます所から、五六名の巡査がわざわざ出張して、道を附けることもあり、其又號外賣りを當込んで、澤山の露店商も出掛けて居ります。



○土耳其の騎兵大佐

此圖は、土耳其の騎兵大佐ユースーフ氏の肖像でございますが、同氏は本國に居ります時分、日露の關係漸く切迫して、今にも戰爭になるだらうと云ふ噂を聞き勇心勃々として禁じ難く、自分も日本軍に投じて、露國を征伐してやりたいと思ひ、先頃はるゞ我國に參つたのですが、唯今では更に朝鮮に參つて居ると云ふことです。



◎少年諸君に告ぐ

少年諸君の中で、海陸軍恤兵部へ、金錢なり物品なり、寄贈したいと思召す方があれば、本社は喜んで其手續を致しますから、多少に拘はらずお送りなさい。

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL　AWM2020.22.307

此廣告を見て御注文の御方は時事新報社發行の『少年』に依る旨御申添を乞

福澤先生著書目次

福澤全集

原本五拾部、百五冊合本
全五冊（背像入）
正價拾貳圓（送料は別に申受く）

先生四十年間の著譯書收めて此中に在り之を讀まざる者は未だ新日本の文明を語る可からず

福翁自傳

七版全一冊
正價拾五錢
郵稅貳錢

正價上製壹圓（郵稅拾貳錢）並製四拾錢（郵稅八錢）
先生自叙の詳傳にて併せて時勢の變遷を知るべく又立志處世の模範として裨益少なからず

福翁百話

十六版全一冊
肖像及筆蹟入
背皮金字入美本
合本上製全一冊

正價壹圓二十錢（郵稅十錢）
百話の上製品切に付更に便利の爲め百餘話と合冊上製となせり好學の士は一本を備ふべし

福翁百餘話

七版全一冊
正價拾五錢
郵稅貳錢

人生の獨立其他に付て懇說せられたるもの百話を讀みたる者は亦此書を讀まざるべからず

福翁百話

三十三版全一冊
並製筆蹟入

正價三拾五錢（郵稅六錢）
先生入念の著述宇宙の妙理及び居家處世の心得を諄々說きて何人も座右の規箴と爲すべし

東京市京橋區南鍋町二丁目十二番地
發行所 電話（福岡出張局用特新橋一四九 同事務局用特新橋二二五五 同新橋三三七 二七〇八番）
時事新報社 出張所 同 出張所

女大學評論 新女大學

廿一版合本全一冊
正價貳拾錢
郵稅四錢

新日本文明社會の女子は如何に世に處し身に行ふべきか先生卓拔の高論載せて此書に在り

修業立志篇

十七版全一冊
正價貳拾六錢
郵稅四錢

先生の演說及び論文を集めし慶應義塾の教科書にして懇切に後進子弟修學立身の心得を說示したり

明治十年 丁丑公論 瘠我慢の說

六版合本全一冊
正價拾八錢
郵稅貳錢

前者は西鄉翁擧兵の心事を詳論し後者は勝榎本兩氏の進退を痛論せる者共に一世の大議論大文章也

大阪市北區堂島濱通一丁目四十番屋敷
電話（特東四九二）

此廣告を見て御注文の御方は時事新報社發行の『少年』に依る旨御申添を乞

千古の快報

石原ばんがく君編

家庭のたのしみ

川柳の卷

石版刷 極彩色美しく 面白い繪本

俳諧の卷

おとし噺しの卷

問答地口の卷

サアノ〳〵坊ちやん方嬢さん方おまちかねの本が出來ました。一度見たら御膝が宿がへする程笑ひだす繪本笑ふ門には福が來る御正月のおなぐさみ早く見たまへ買ひたまへ

どれでもよりどり賣價 拾錢 〃郵稅各二錢づゝ

ポンチ

北澤保次郎君新案並書

お伽繪はなし

全部六册毎月發行 一册金十一錢 郵稅二錢

ポンチ繪で評判の北澤先生が考へられた敎育的愉快な滑稽な此繪本、昔の桃太郎の鬼ヶ島征伐でなく猶それよりも一層雄壯な活潑な明治の桃太郎はどこを征伐するのでせう、一つ買て御覽なさいポンチの外に繪さがしもあります

第一編 明治桃太郎（メイジモヽタロー）
第二編 勝捷山（カチカツヤマ）

●本誌は全然營利の外に立ち其純益を赤十字社に寄附す

日露戰報

第壹號 二月廿日發行

各種懸賞文 大募集あり

口繪 附錄 旅順攻撃帝國海軍大勝利 精巧大判寫眞版。ホンチの諷刺實景畫 其他插畫八枚

露西亞地圖 は詳確 ◉本戰報は 坪井文學博士。萩野文學博士。中村法學博士。寺尾法學博士。三上文學博士。瀨川文學博士 其他諸大家の時局に關する寄稿あり 軌れも多趣味有益なり

每月壹日 十日 廿日 發行 參回

正價一冊金十錢 郵稅一錢 六冊前金郵稅共金十三錢 十二冊同二十二錢

發行所 東京神田本局裏神保町三一〇番 電話京橋一六

時事新報社 出張所 同 出張所

全書籍國雜誌各地店 富山房 賣捌

『少年』漫畫

◎無理な望み

凹坊「伯父さん露西亞征伐に軍艦に乘ッて行くの

伯父「そうだよ

凹坊「ジャア船から落ないようにおしなさいよ落たら電信かけて下さい私が行ッて助けて上るから



此廣告を見て御注文の御方は時事新報社發行の『少年』に依る旨御申添を乞

藻がくれの海老茶袴の廣告に

客の浪さへよするみの磯

浦野網人



玉親之袴

卸部

東京日本橋區長谷川町

美濃磯本店

電話浪花二八五九番

小賣部

本郷五丁目 美濃磯支店

電下谷一四一五番 淺草諏訪町 美濃磯支店

小賣部

芝區新櫻田町 小田商店

牛込神樂坂 伊澤商店

四谷傳馬町二丁目 伊澤支店

最上等

カルタ齒磨

化粧品各種

御婦人束髮用

小間物類

東京市京橋區尾張町二丁目

光明堂

電話新橋 二七六七番

此廣告を見て御注文の御方は時事新報社發行の『少年』に依る旨御申添を乞

精確無比●第六版發行

時事新報滿韓地圖

附 亞細亞及歐羅巴略圖

●石版色摺折本
●表紙附携帶便

發賣部數を以て推すに全國中に本圖を持つもの五十戸毎に一部の割合なり

戰報を讀むもの戰地に行くもの皆近隣より見本を借りて其重寶サを知らる可し

一部 正價拾五錢、郵稅貳錢、郵券代用一割增（五錢切手以上にて）

時事新報讀者に限り特別減價一部拾錢郵稅貳錢、郵券代用一割增

（注意）右減價は時事新報紙面にある割引券を切拔き之に代金を添へ注文せらるゝものに限る（割引券壹枚に付地圖壹部限り）。特約取次店に於ても本社同樣に取扱ふ可し

發行所 東京京橋區南鍋町二丁目十二番地 時事新報社

取次所 大阪堂島濱通一丁目四十番屋敷 時事新報社出張所及各地特約新聞店、書林

『少年』第五號目次

二月一日發行

口繪『ちん〳〵わん〳〵』（石版畫十度摺）山本芳翠筆

中繪 たつのおとし子、玄武洞

○鳥一の邪推……ひばり
○雪達磨……はうめい
○野邊の小鳥……岩野泡鳴
○惡龍退治……ひばり
○ほー法華經……仰天子
○お庭太平記……篠山吟葉
○たつのおとし子……妹尾秀實
○冬の昆虫採集……三宅恒方
○昔時の海戰……噎峰
○軍隊と歩哨……建朝少尉
○人間化したる猿……
○龜の競爭……
○危い幅跳び……
○世界一の大男……
○子供の金儲け……一記者
○玄武洞……理學士 佐藤傳藏
○獸國漫遊記……北澤樂天
○サッサと踊れ……永島永洲
○洪水……林蘭園
○時事解說……安岡秀夫
○帝國の海軍……鏑木海軍大佐
○懸賞當選披露……
○第四回懸賞作文……
○懸賞考物答案……
○第五回懸賞考物……北澤樂天出題
○雜報……

●第壹號三版●第貳號再版●第四號再版●第一號より取揃へ御注文に應す●

毎月一回 少年 一日發行

定價				
冊數	定價	郵稅	合計
一冊	金拾錢	壹錢	拾壹錢
六冊半年分	金五拾七錢	六錢	六拾參錢
十二冊一年分	金壹圓八錢	拾貳錢	壹圓貳拾錢

廣告料			
等級＼料金	一行 五號活字二十四字	半頁三十二行	一頁六十四行
特等	（表紙の四）本等は一頁以下謝絕す		貳拾圓
普通	貳拾錢	六圓	拾壹圓

●郵券代用は（五錢以上の切手にて）一割增の事●一旦受取りたる前金は通貨を以て返戻することなく「少年」代の前金は「少年」を以て又廣告料の前金は廣告を以て勘定するとき御承知可被下候●郵便小爲替を以て御送金の節は其爲替證書面「受取人宿所氏名指定欄」内へ必らず「東京京橋區南鍋町二丁目十二番地時事新報社」と御明記可被下候●御注文の節宿所氏名は楷書にて明白に御記載可被下候●總て前金の事

明治三十七年三月一日發行（第六號）

不許複製

發行兼編輯人 光吉荒次郎

印刷人 金子千十郎

發行所 東京市京橋區南鍋町二丁目十二番地 時事新報社

電話 編輯用（特）新橋一四九（特）新橋二二五五 事務用（特）新橋三二七（特）新橋二七〇八

出張所 大阪市北區堂島濱通一丁目四十番屋敷 電話（特）東四九二 時事新報社出張所

印刷所 東京市日本橋區兜町二番地 東京印刷株式會社

此廣告を見て御注文の御方は時事新報社發行の『少年』に依る旨御申添を乞ふ

明治三十七年三月一日發行（毎月一回）一日發行少年第六號
明治三十六年九月二十九日第三種郵便物認可

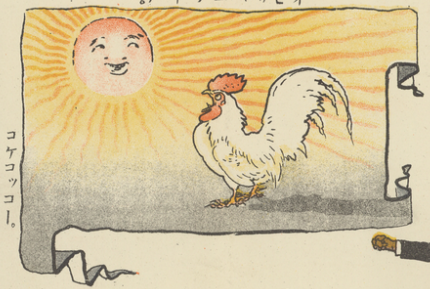


東京印刷株式會社印行

PR 82/154
(10)
AUSTRALIAN WAR MEMORIAL

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL AWM2020.22.307


オーカワイソーニ
カワイソーニ。
ドレダイジニ
カヤシテヤリマセウ。
オノレ
ムホーモノメ。
コノタマゴヲ
ノマシテ
タマルモノカ。



オヒサマエライナ。



ウム ヨシヨシ。

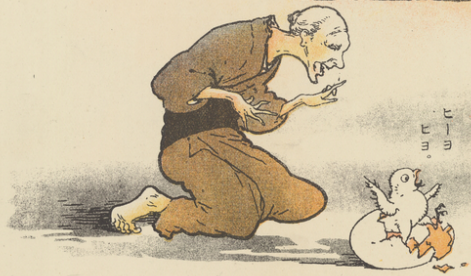
アノニハトリヲ トッテ、 オサケノ サカナニ ナサイ。



イマニトッテヤルゾ。

タント タベテ ハヤク オホキク ナレヨ。

コレハ ハヤイ、 オホキナ ヒヨコダ。



オヤモー ウマレタ。

ヒーヨ ヒヨ。

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL AWM2020.22.307



オノレ、
ニクイ
ワシメ、
ガ。

ワシノヤツガ、
ウチノニハトリヲ
サラッテ
ユキマシタ。

ボクガカタキヲ
トッテアゲマス。

カワイソーニ、
セッカク
ダイジニ
ソダテタ
モノヲ。



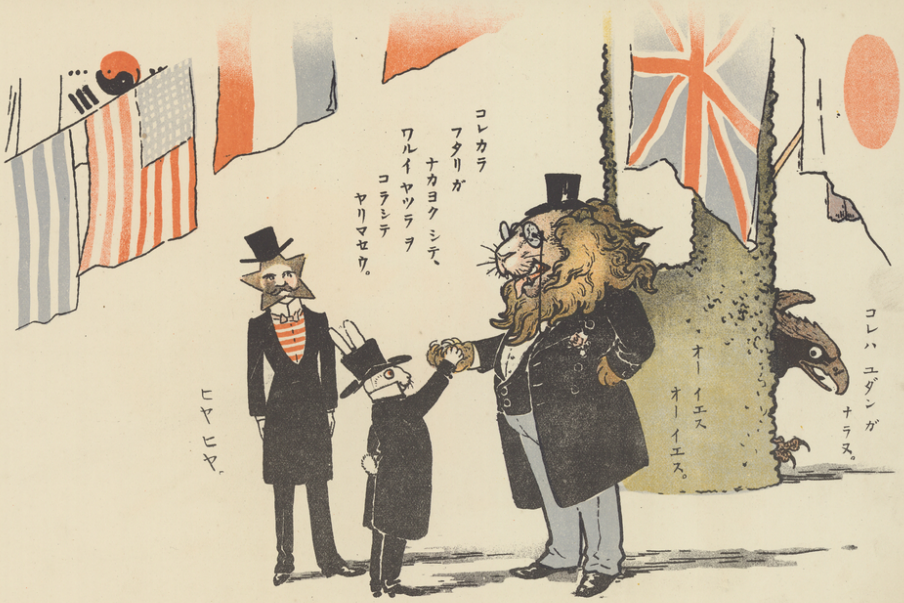
「アトイ
ワシメ。
イマニ
ミテ井ロ。

ジタバタ
シテモ
モーダメダ。

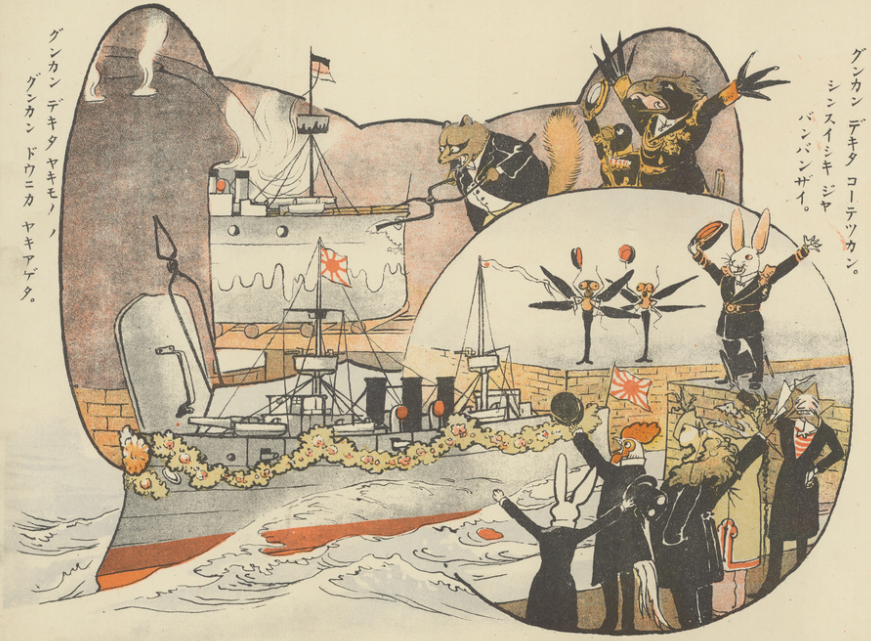
コケーコッコ
コケーコッコ。

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307





AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307





AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307



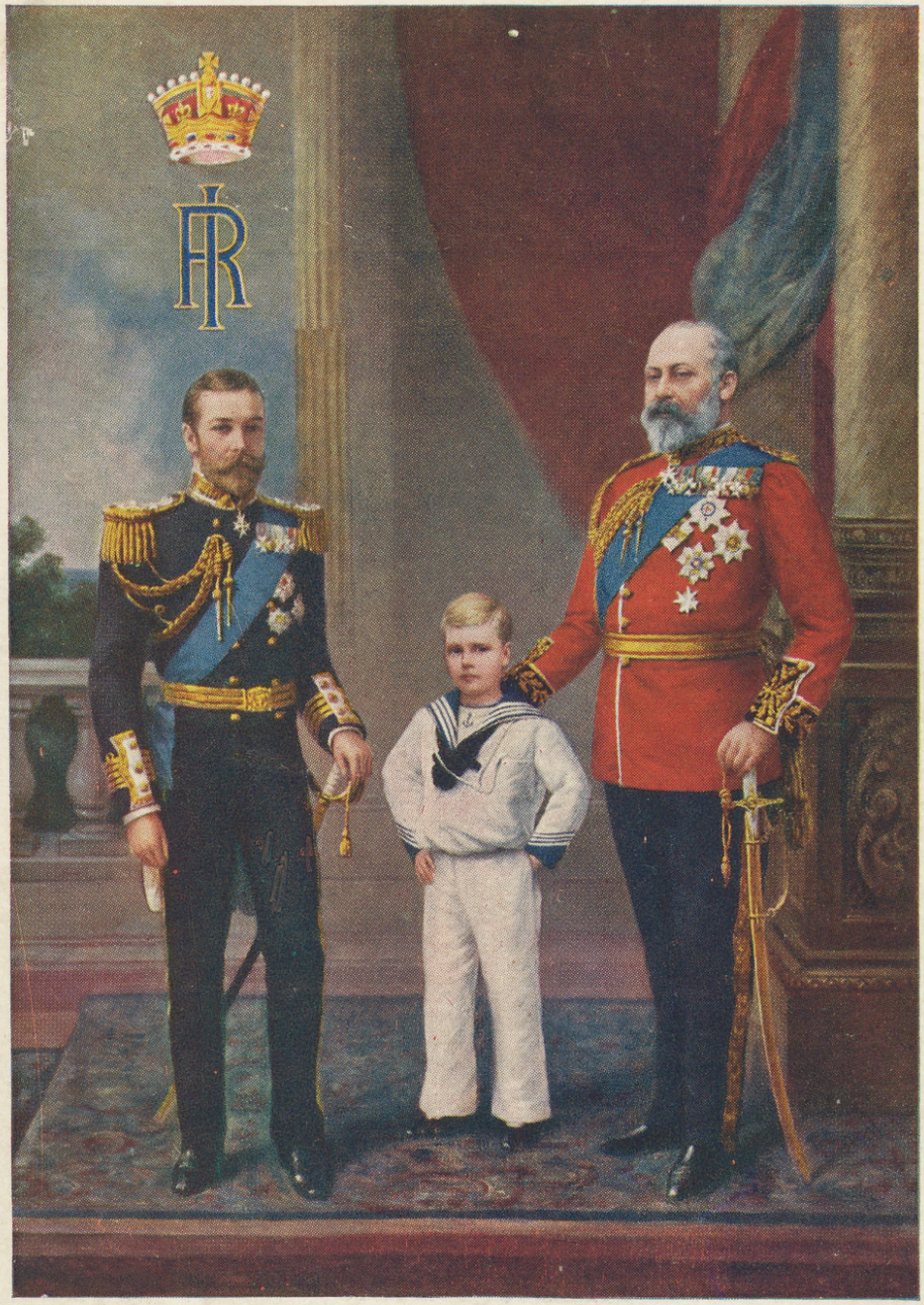


AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307



PR 82/154
(11)
AUSTRALIAN
WAR MEMORIAL

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL
AWM2020.22.307



ODDENINO'S
IMPERIAL RESTAURANT,

60 & 62 REGENT STREET, W.

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL AWM2020.22.307

To Capt. McHugh now in
Japan - 30/1/04

G. Grove Blackwell
P. W. Sullivan
B. L. Bannatyne
Katie Grove-Blackwell
F. W. Hagelman
Annie MacHugh
Archett Corbet
B. M. Hutchison
Rowland A. Corbet
W. S. Hudson

Menu du Souper
30 Janvier

Consommé en Casse
Filets de Sole Orly
Escalope de Ris Veau à l'Impériale
Poussin Roti
Buffet Froid
Salade
Glaces Variées - Gaufrettes

Oddenino's
Impérial Restaurant

Rosa Hegarty

H D Hutchison Capt RE

D D M Mennelly

Priscilla M. Bannatyne

Fred H Cory

Maud Hudson

Good Luck - Safe return from all.

PR 82/154.
(12)
AUSTRALIAN
WAR MEMORIAL

AUSTRALIAN WAR MEMORIAL AWM2020.22.307